柊　千鶴

Presented by
Tizuru Hiiragi

相性最高な最悪の男

The best and worst man in the world

目次

序　章　軽率な約束 …… 5
第一章　遅すぎる後悔 …… 9
間　章　神原奏太の災難 …… 67
第二章　譲れない境界線 …… 75
第三章　天邪鬼の逃避行 …… 109
第四章　仮面の下 …… 149
間　章　『第三回・篠崎聡攻略会議』 …… 199
第五章　皮肉屋の恋 …… 211
第六章　微かな予兆 …… 285
間　章　月島亮介の覚悟 …… 329
第七章　未来への一歩 …… 381
第八章　離された手 …… 429
間　章　残されたもの …… 457
第九章　望まぬ再会 …… 471
第十章　篠崎聡の証明 …… 519
間　章　月島玲二の決別 …… 563
終　章　相性最高な最悪の男 …… 597
書き下ろし　皆で重ねる未来 …… 619
あとがき …… 646

序　章　軽率な約束

《とーる：二十七歳会社員、関東在住。細身のネコ専。月一くらいでセフレ募集》

軽い電子音と共に、淡泊な募集文がサイト上に掲示される。ディスプレイに映し出されているのは、会員制の出会い系サイト。それも、同性愛者限定のものだ。

俺――篠崎聡は、同性愛者である。

自身の性的嗜好については、誰にも話すことなくひた隠しにしてきた。

そんな俺にとって、匿名で相手を見繕うことがきるインターネットは欠かせないツールであり、三日に一度はこうしてパソコンに向かっていた。

性欲が強い訳ではないが、たまに人肌恋しくなることがある。そんな時、手軽に後腐れなく欲を満たしてくれる相手が、俺には必要だった。

「コイツはあまり好みじゃないな」

寄せられた返信を流し見ながら、ぬるくなったビールを一息に飲み干す。

今日は、初夏にそぐわない熱帯夜だ。うんざりするほどの暑さと乏しい成果に眉をしかめていると、新たな相手からのメッセージが追加された。

《りょう：はじめまして、りょうと申します。プロフィールを拝見しました。気が合うと思うのですが自分は如何でしょうか。良ければご連絡ください》

「へぇ、悪くないな」

相手のプロフィールには、引き締まった体付きをした男の写真が載っていた。それを一瞥して、年齢や性癖、希望するプレイ内容に目を通していく。

そう長くない文章を読み終える頃には、すっかり乗り気になっていた。

年齢も近いし、性的嗜好も合うし、何より身体が良い。早速、メッセージを送ってみたところ、丁寧な文章ですぐに返信が返ってきた。人柄も悪くなさそうである。

こうして事前に相手を知れるのが匿名の利点だ。互いの性癖も曝け出せるので、後になって『話が違った』なんて不運は早々起こらない。もちろん、見極めは肝心だが。

更に数回のやりとりを経た後、俺は軽い気持ちで会うことを決めた。

《とーる：では今週末、会いませんか？》

《りょう：是非お会いしましょう。場所は××市××ホテルで――》

この時、俺は知る由も無かった。

まさかこの一通のメッセージで、最悪の男に執着される羽目になろうとは。

第一章　遅すぎる後悔

1

男と約束した日の朝。俺は心なしか浮ついた足取りで会社へ向かっていた。
気分が高揚している原因は、今夜の約束以外にもある。明日は久々の休みなのだ。
一ヶ月前に新しい企画が発足してからというもの、会議やプレゼンの準備などでろくに休めない日々が続いていた。それが昨日、やっと一区切りついたのだ。
今日の仕事は軽く流そう。昨日の残務整理をして定時で上がろう。そんな不真面目な決意を固めたところで、駅に辿り着いた。
駅のホームは通勤ラッシュでごった返している。少しでも空いている車両に乗り込もうと列を観察していると、人混みの隙間から見知った顔が覗いた。
「うわっ」
それ見て、すぐさま踵を返す。朝から見たい顔では無かったからだ。
男の名前は月島亮介。茶色がかった黒髪をきっちりと撫で付け、高級そうなスリーピースのスーツに身を包んだ、整った顔立ちの男である。
しかし、綺麗な見た目に騙されてはいけない。その中身は真っ黒だ。俺は身をもってそれを思い知らされていた。

俺と月島は、犬猿の仲と言っても差し支えのない関係だった。
ヤツとは性格だけではなく、意見、方針、手段、とにかく全てが正反対であり、一緒に仕事をしようものなら、終始互いの行動にケチを付け合う羽目になる。
俺としては疲れるのでなるべく関わり合いたくないのだが、悲しいかな、入社以来あの男との腐れ縁が切れたことはなかった。
特にこの一年など酷いもので、同じ部署に配属されて日々を共にしている。
何故、わざわざ仲の悪い人間を組ませるのか。
人事部に恨み言の一つも吐きたくなるが、理由は明白だった。二人で存分に叩き合った案には一分の隙もなくなり、結果的に良い企画が生まれるのだ。
それでも俺にとって、月島はストレスの権化のような男である。顔を合わせる時間は、短ければ短いほど良い。
「……はぁ」
かくして。朝から何となく疲れた気分になりつつ、俺はそっと月島とは違う車両へと乗り込んだ。

「おはようございます。篠崎先輩、調子でも悪いんですか？」
出社早々、苦い顔をしている俺に声をかけてきたのは、後輩の神原奏太だ。
神原との付き合いはもう三年になるだろうか。新人教育を担当していた縁もあってか、

妙に懐かれており、仕事外でも付き合いを持っている数少ない人間である。
「おはよう。なに、朝から電車で嫌な顔を見ただけだ」
小声で囁いて、月島の方に向けて顎をしゃくる。
すぐに事情を察したらしい神原は、納得した顔で頷いた。
「ああ、『天敵』の月島さんですか。本当に仲悪いんですね」
『天敵』というのは、いつの間にか社内に広まっていた呼び名である。本人たちも特に否定しなかった結果、今ではすっかり定着してしまっている。
それほど、俺たちの相性の悪さは知れ渡っていた。
「ただでさえ、仕事で嫌というほどやり合うんだ。せめて外では会いたくないな」
「そんなに悪い人とも思わないんですけど。やっぱり相性なんですかね」
「お前はまだ真っ向からやりあったことはないだろ？　議論でもすればすぐに分かるぞ、アイツの性根の悪さが」
「そこまで言われると気になりますね。まぁ、篠崎先輩と対等に言い争っている時点で、一癖も二癖もある人だということは分かりますけど」
神原の言葉に引っ掛かりを覚えて眉をしかめる。
「どういう意味だ」
「いや、僕程度では先輩方のレベルには追い付けないな、という話です。では、そろそろ外回りなので行って来ますね！」

「おいこら……って、逃げ足の早い奴だな」
始業の鐘が鳴る前だというのに、神原はそそくさと出かけて行ってしまった。予定表を見れば、今日は昼まで外回りらしい。ご苦労なことだ。
ついでに他の同僚の予定も眺めていると、自分の他にも明日休みを取っている人間がいることに気が付いた。
（うわ。明日は月島も休みなのか）
どうせなら別の日に休んでくれた方がなるべく顔を合わせずに済むというのに、もったいない。何だか今日はとことんツイていない気分だ。
しかし、ほぼ同じ企画に携わり、似たような仕事をしているのだ。休みのタイミングが被るのも仕方がないかもしれない。
こればかりは諦めるしかないので、俺は気を取り直して仕事に取り掛かることにした。差し当たっては、昨日の会議録の見直しから始めるとしよう。
しかし、それは早々に遮られることになる。
「篠崎君。昨日の会議結果についてなのだが」
「……なんだよ」
他ならぬ月島によって。
はす向かいの机から飛んできた声に鋭く視線をやると、不穏な空気を察した同僚たちが、そそくさと席を立つ姿が視界の端に過ぎった。誰も俺たちの仲裁には入りたくないらしい。

取り残された課長が裏切り者を見る目で部下たちを見送っているが、流石にみんな過剰反応し過ぎだと思う。何せ、つい昨日山場を越えたばかりなのだ。そこまで議論が過熱するような案件が残っているとは思えない――

「最後に君が提案した今後のプラン。いささか短絡的だと思うのだが自分では気付かないのか。もっと長期的な視点を持つべきだ。あまり何度も口を挟みたくないのだが、会社が損失を被るのが分かっていて見逃すことは出来なくてね」

「あ？　そういうお前の話はいつも机上の空論なんだよ。お前の意見は予測じゃなくて空想だ、世の人間が全て合理的判断だけで動くと思うなよ。遊びの無い人生を送っている人間に理解を求めるのは難しいかもしれないがな」

そんな甘い見通しを立てていた俺が間違っていた。

あっという間に火花を散らした俺たちは、結局昼になるまで口論を重ね、見かねた上司の仲裁によって一応の収束を迎えるのであった。

「ただいま戻りました。あれ、篠崎先輩。朝とは違って滅茶苦茶やる気出してるじゃないですか。相変わらず機嫌は悪そうですけど」

「……色々あってな」

「うわ、顔こわっ」

外回りから戻ってきた神原が、俺の顔を見て口の端を引き攣らせる。

何も言わずに目をやると、神原はわざとらしい悲鳴を上げ、俺の視線を遮るように両手を突き出した。
「うわ、その人を殺せそうな目付きを引っ込めてくださいよ。未だに慣れないんですから」
「うるさい。無駄口叩いてないでお前も手伝え。来週のプレゼンで絶対アイツに吠え面かかせてやるからな」
「ああ、なるほど大体察しました。今日はのんびりできると思ったのになぁ」
神原がこれ見よがしに溜息を吐いて天を仰ぐ。それでも何だかんだ毎回手伝ってくれる辺り、良い後輩だと思う。絶対言ってやらないが。
「今度のプレゼンが終わったら、何か美味い物でも食べに行くか」
「僕、焼肉が食べたいです」
「よし、それにしよう。奢ってやるからバリバリ働いてくれ」
「いいですね、買収されました。頑張りますよ！」
先ほどとは打って変わって、良い笑顔でサムズアップを決める姿に苦笑する。なんとも調子のいいヤツだ。
「ん？」
ふと視線を感じて振り向くと、のんきな会話を繰り広げる俺たちを、月島が少しばかり険のある目で眺めていた。
俺は売られた喧嘩は買う主義だ。神原には気付かれないように横目で月島の視線を受け

止め、挑発の意を込めて余裕の笑みを浮かべる。
月島は一瞬眉をしかめたが、すぐにいつもの無表情に戻って手元の資料へ視線を落とした。
「……煽り甲斐のないヤツ」
いつもそうだ。何をしてもアイツが取り乱すことはない。あそこまで冷静にあしらわれると、一度くらい激昂させてやりたくなる。
実は色々と試してきたのだが、喧嘩を吹っ掛けるように対立する企画を打ち立てても、ぐうの音も出ないほど言い負かしても、終ぞアイツのすかした仮面を剥ぎ取ることは出来なかった。一体どうしたらあの鼻を明かしてやれるのだろうか。
「篠崎先輩、どうかしました？」
「何でもない。この資料、裏付けを取っておいてくれるか」
「はい、分かりました」
一時意識が逸れてしまったが、今日はそんなことをしている暇はない。俺は頭を振って意識を切り替えると、再び企画書作りに没頭した。
集中している時は、時間の経過があっという間に感じるものだ。
何度も企画書の内容を反芻していた俺は、終業を告げる鐘により現実へと引き戻された。
「もうこんな時間か」

「店が混む前に、晩飯どこかで食べてきちゃいますか？」
隣で作業していた神原も大分集中していたのだろう。声に疲れが滲んでいた。
遅くまで残業になりそうな日には、神原と晩飯を取るのが習慣となっていたが、今日はそういう訳にはいかない。
例の約束があるのだ。手早く帰宅して、風呂と着替えを済ませてこなくては。
「いや、今日はもう上がる」
「珍しいですね。それなら僕もたまには早く帰ろうかな」
「そうしろよ、仕事なんか二の次にして人生楽しまないと損だぞ」
「おっ、今まで聞いたアドバイスの中で一番参考になるヤツですね」
「おい。まったくお前もいい性格してきたよな」
「日頃のご指導の賜物ですかね。……ほらほら篠崎先輩、今日はお急ぎなんでしょう。怖い顔をしてないで帰った方がいいんじゃないですか？」
「そうしておいてやるよ、お疲れさん」
「お疲れ様でした！」
俺は、後輩の育て方を間違えたのかもしれない。
誰に似たのか、随分とふてぶてしく育った後輩に見送られて会社を後にする。
初夏ともあって外はまだ明るい。日が暮れる前に職場を出るのは、随分と久しぶりな気がした。

2

目的のホテルは、ラブホテルとは一目で分からない外観をしていた。しかし、ラブホはラブホ。いかにもな甘い雰囲気の男女が入っていくのが遠目にも見えた。

今日の相手である『りょう』は、先に部屋に入っているらしい。駐車場に着いて着信を確認したところ、二〇三号室で待っていると連絡が来ていた。

フロントを抜け、案内された通りに部屋に向かう。そして、部屋番号を再確認してから扉を開いた。

「こんばんは。『とーる』で……」

数歩部屋の中に入ったところで息が止まる。

いや、時すらも止まった気がした。

『天敵』月島亮介。嫌というほど見知った顔が、目を丸くしてこちらを見つめていた。

珍しく動揺を露にしている姿に、そういう顔は仕事でさせてやりたかったと、現実逃避気味に思う。

永遠にも思える一瞬の間、呆然と立ち竦んでいたが、部屋の扉が閉まる音でようやく我に返った。

「ど、どうしてお前がここにいる!?」

「それは私の台詞だ！　君は、同性愛者だったのか⁉　まさかこんな形で知るなんて……」
「それを言うなら、お前だってなぁ……！」
いつもはすらすらと言葉を生み出す口が、今はお互い使い物になっていない。
こんなことは初めてだ。言葉が出てこないどころか呼吸も怪しく、しばし息苦しい沈黙が流れる。気が付けば、空調の効いた室内だというのに汗をかいていた。
少し冷静になったところで、今まで交わしてきたやり取りを思い出してしまう。匿名性に胡坐をかいて、赤裸々に話をしていたことが完全に裏目に出ていた。
（ネコ専だとか、M気質だとか、好みの身体だとか。俺は、月島相手に何を言っていたんだ……！）
恥ずかしさと悔しさで真っ赤になった顔を両手で覆う。指の間から相手を見れば、あちらも似たような有様で頭を抱え込んでいた。
それもそうだろう。俺も月島には結構すごいことを言われた気がする。
君には赤い縄が映えそうだとか、劣情をそそるとか。今思い返せば、確かに月島らしい気障な言葉遣いだ。気付かなかった自分に腹が立つ。
ところで、だ。
「……月島亮介だから『りょう』か。安直なネーミングだな」
「君だって、篠崎聡で『とーる』というのは同じレベルだと思うぞ」
思わず口に出してしまった突っ込みに、間髪を入れずに嫌味が返される。普段は腹立た

しさしか感じないやり取りだが、今はいつもの調子を取り戻す助けとなり感謝の念すら湧いていた。
一つ咳払いをして、ようやく落ち着いてきた頭で結論を出す。
この件は、無かったことにしよう。
「とにかくだ、今夜のことは忘れて帰ろうぜ。お互い、その方が都合良いだろ？」
「お、おい待て！」
「……何だよ」
背を向けたところで、荒っぽく腕を掴まれる。痕が残りそうな強さだ。
苛立ち交じりに振り返ったところで、俺は言葉を詰まらせた。あの月島が、まるで泣きそうな顔をしていた……気がしたからだ。
きっと見間違いだろう。瞬きの後には、見慣れた不敵な笑みが俺を見下ろしていた。
「逃げるのか」
「あ？」
「それとも怖いのか」
明らかに挑発されている。そう分かっていてもこの男に舐められるのは嫌で、月島へと向き直った。
「何も無かったことにしてやると言ってるんだから協力しろよ。知り合いに……それも、よりによってお前に抱かれるなんて御免だね、後腐れがあり過ぎるだろ」

「口の固さは保証するよ。それに、私も君に秘密を知られたのだから、お互い様だろう？しかし、君は公私混同するタイプだったのか。意外だね」
「大前提として、俺はお前が大嫌いなんだよ。その面を三時間見続けるだけでも苦痛なのに、抱かれるなんて出来る訳ないだろ」
「まあ待て。ラブホテルに来て何もせずに帰るなんて、ナンセンスだと思わないか。君も今日は期待してきたのだろう？」
「……っやめろ、寄るな！」
低く囁かれて焦りを覚える。知りたくなかった発見だが、色気を滲ませた月島の声は、存外腰にくる。ただでさえ、最近は忙しくて溜まっているのだ。早く逃げなければ、本当に取り返しのつかないことになる予感がした。
焦燥感に駆られて月島の手を振りほどき、入ってきた扉に取り付く。そのまま勢いよく飛び出そうとしたが、それは叶わなかった。
「しまった、オートロック……！」
このラブホテルの部屋は、入室すると自動で施錠されるようになっている。開けるためにはフロントに電話をかける必要があるのだが。
「……ッ！」
そろりと振り向きかけた顔の側に、月島の右手が叩き付けられる。耳元で鳴った大きな音に身を竦ませると同時に、簡単には逃がしてもらえないことを悟った。

緊張から振り向けないままでいる俺の腰に、熱いものが押し当てられる。
それがナニかなど考えるまでもない。
「……！」
興奮しているのか。あの月島が、俺を相手に？
到底信じられなかったが、その事実は奇妙な優越感を俺に与えた。
心が、揺らぐ。
「みすみす逃がすと思うか？」
「……ッ」
至近距離で流し込まれた声が、思考を犯していく。
いつの間にか服の隙間に忍び込んでいた月島の手は、火傷させられそうなほど熱く、明らかに欲情した手付きでシャツの奥へと侵入してきた。
力が抜け、扉へ縋り付いたまま崩れ落ちそうになったが、それは月島によって阻まれた。脚の間に膝を捻じ込まれ、股間を嬲るようにして無理矢理立ち上がらされる。
「あっ……う、やめろっ」
「やめて欲しいならしっかり立て」
扉に押し付けられ、反応を示し始めた股間を圧迫される。堪らず腕を突っ張ろうとしてもビクともしない。腹いせに足を踏むと、仕返しとばかりに首筋に噛みつかれた。
「痛って……！」

鋭い痛みが反骨心を呼び覚ます。
そうだ、なんで俺がコイツなんかに良いようにされなきゃいけないんだ。
「大人しくしていろ、悪いようにはしない」
「誰がお前の命令なんか聞くか！」
「ぐっ……」
一瞬の隙をついて月島の鳩尾に肘を叩き込む。一切手加減しなかったので流石に効いたのか、月島は呻き声をあげてよろめいた。
腕の中から解放され、思わず安堵の息が漏れる。
「はっ……これ以上やるなら本気で殴るぞ」
「そういう台詞は、殴る前に言って欲しいものだね」
「もう一発ぶん殴るって言ってるんだ。丁度いいから日頃のストレスを発散させてもらおうか」
「分かった、離れるから落ち着いてくれ」
本気で拳を握りしめると、月島は肩をすくめて距離を取った。
その姿を視界の端に収めながら、慎重に電話へと近付いていく。そして、受話器を持ち上げようとした瞬間、月島が「ところで」と口を開いた。
「これは親切心なのだが、その状態で外に出ると言うのはいささか問題があるのではないだろうか」

「……」

月島の視線に釣られて己の下半身を見やる。その状態とは、一目で分かるこのズボンの膨らみを指しての言葉だろう。

全くもっていい訳がない。返す言葉もなく押し黙ると、月島は殊更甘美に囁いた。

「――なぁ、嫌いな男に犯されるというのも、屈辱的で興奮しないか？」

ぞくり、と身体の芯が疼く。

思わず想像してしまったのだ、嫌々月島に組み敷かれ、惨めに嬲られる自分の姿を。

受話器に手を置いたまま動けなくなった俺を見て、月島は笑みを深めた。

「ここまで来てしまったのだから、一度くらい試してみないか。満足できなかったなら、その時に改めて私を殴り飛ばして出ていけばいい」

「……」

「正直なところ私も辛いんだ。君も知っての通り、最近は忙しかったからご無沙汰でね。だから頼むよ。抱かせてくれないか？」

眉根を寄せて同情を誘う表情で懇願する月島の姿は、俺の胸に暗い喜びを沸きたてた。

……例えそれが演技だと分かっていても。

押してダメなら引いてみろというのは交渉事の基本だが、月島は何より、相手に『自分が決定権を握っている』と錯覚させるのが上手かった。仕事中に何度も見てきた手口だ。それでも、実際使われる立場になってみると、その威力を痛感した。

「どうだ？」
「……仕方ない、な」
そして俺は、騙されていると理解しながらも性欲と優越感に負け、受話器から手を離してしまった。やっぱりやめておけば良かったと思ったのは、俺を組み敷いた月島の笑みを見た後である。
その後、どうなったかは言うまでもない。
目先の欲に目が眩んだ人間は、往往にして判断を誤るものだ。無論、一回だけで終わる訳がなく。加えて言えば、一度達して力の抜けた身体で逃げられる訳もなく。
抵抗も懇願も全て流され、身体の奥まで蹂躙されて気力を根こそぎ奪い取られた俺は、月島の気が済むまでいいように貪り食われる羽目になるのであった。

「……騙された」
結局、意識が飛ぶまで抱き潰された俺は、目が覚めるなり悪態を吐いた。
なんせ、俺はしっかり殴ろうとしたのだ。当然のように二回目を始めようとする月島を。別に良くなかった訳じゃない。むしろその逆で、これ以上続けたらやばいと思ったから逃げ出そうとしたのだが、それは遅すぎる後悔だった。
危なげなく俺の拳を受け止めた月島は、嘲笑すら浮かべて言ったのだ。
「これを言うのは二度目だが……みすみす逃がすと思うか？」

などと。そこから先は思い出したくもない。
いや、分かってはいたけれども。ロクなことにならないと思ってはいたけれども。それにしたって、もう少し手加減してくれてもバチは当たらないんじゃないんですかね、というのが正直な感想だった。
情けないことに本気で死ぬかと思ったのだ。泣いて叫んで、最後の方は声も出せずに呻いていた気がする。鬼畜の所業だ。
「起きて早々ご挨拶だな。君だって気持ち良さそうにしてたじゃないか」
「俺は何度もやめろ、嫌だって言っていたんだが聞こえなかったか？」
「それはすまなかった、喘ぎ声しか聞こえなかったものでね。しかし、満足させられたようで安心したよ」
「この鬼畜野郎……」
もはや噛み付く元気もなく、それ以上は何も言わずに身支度を整え始めた。月島の方は既にスーツを着込んでおり、髪までセットし直している余裕ぶりだ。
待ってもらっているというのも腹立たしく、乱雑に服を身に付け、荒れた髪もそのままに荷物を手に取る。そして、何やかんやと理由を付けて月島を先にホテルから追い出し、適当にロビーで時間を潰してから後を追った。
時刻はすでに深夜。ホテルの前は閑散としていたが、それでも人気が無いのを確認して外に出る。

まだ疲労感が残っている上に、あちこち痛んでおり、よたよたと歩くだけで精一杯だ。いかにも抱かれてきましたというこの様を、あまり人目に晒したくはなかった。

「痛ぇ……」

ここへ来た時の三倍以上の時間をかけて車まで辿り着き、乗り込もうとした瞬間。力強い手に腕を引かれて、気が付くと後部座席に放り込まれていた。

「な、何……!?」

ドアが閉まる音に慌てて顔を上げれば、運転席に乗り込んできた月島と目が合った。

「君はそこで大人しくしていたまえ。そんな身体で運転して、事故を起こされても寝覚めが悪い」

「余計なお世話だ、ほっとけ！」

「寝てろ。うるさい」

「何だと……!?」

こうなったら力ずくで引きずり下ろしてやろうとも考えたが、月島は手早くエンジンをかけて車を動かし始めてしまう。こうなっては暴れる訳にもいかず、不本意ながら月島と夜のドライブに興じることになってしまった。

月島の運転は、いかにも『優等生』といった印象を受けるものだった。加減速は穏やかに、交差点も十分にスピードを落として侵入し、ギアも回転数を合わせてから繋いで……まあ、素直に表現してやるならば大変乗り心地が良く。

元々疲れていたことも相まって、舌の回りも鈍るほどの眠気が襲ってくるのに、さほど時間はかからなかった。

「眠いのなら素直に寝ていろ。その方が静かでいい」

「別に、眠くなんか……ない……」

うつらうつらと船をこぎながらも睡魔に抗う。月島が平然としているのに俺だけ疲れているというのは、何だか負けたような気がして癪だ。

頑なに瞼を持ち上げようとする俺を見て呆れたのか、月島の溜息が聞こえた。反射的に噛みつこうとしたが、もう眠くて口も開けない。

気付けば目の前は真っ暗だ。

ああ、今の溜息はやっと眠ったと思って漏らしたものだったのか。そうぼんやりと考えながら、俺は深い眠りへと落ちていった。

「篠崎……篠崎君……！　起きろ、着いたぞ」

「……あ？」

身体を揺さぶられる感触で目を覚ます。短い時間だが深く眠ってしまったようで、なかなか頭が冴えてこない。

状況を把握するために周囲を見渡すと、窓の外は見慣れた場所であることに気が付いた。俺が暮らしているマンションの地下駐車場だ。

「呼んでも起きないから、駐車場のカードキーは勝手に探させてもらったぞ。元通りサンバイザーに挟んでおいたからな」
「……ああそう」
何故当然のように俺の家を知っているのかとか、その彼氏面は何なんだとか、聞きたいことは沢山あったが、何となく墓穴を掘りそうな気がして聞けなかった。
結局、何も気付なかったことにして車を降りる。
そのままエレベーターに向かおうとして数歩進み、立ち止まる。いくら相手が月島とはいえ、言っておかなければならないことがあった。
「一応、礼は言っておいてやる」
「おや、驚いたね。君の口からそんな言葉が聞けるとは」
「うるさい。言うことは言ったからな、とっとと帰れ」
「分かったよ。それではお大事に、な」
言葉の内容とは裏腹に、嘲笑うような表情を浮かべて月島は去っていった。本当に人を苛立たせるのが上手いヤツだ。もはや怒りを通り越して感動すら覚える。
その背中が車列の向こうに消えていくまで見送った後、俺は今度こそエレベーターに乗り込んだ。
そういえば、月島は今から歩いて帰るのだろうか。もうバスも通っていない時間だ。
（となると、本当に家が近いのか？）

気付いてしまった嫌な事実に辟易する。よく今まで近所で出くわさなかったものだ。
そこまで考えて、はたと止まる。
俺と家が近いということは、月島も同じように車でホテルに向かったはずだ。この近辺からホテルの方面に向かうバスは無い。電車で向かうには、駅からホテルは遠すぎる。
すると、アイツが俺の身を案じてわざわざ送ったというのもあながち嘘ではないのか？
（……いや、タクシーでも使って来たのだろう。俺を送ったのは、帰りの運賃を浮かせるついでだったに違いない）
浮かびかけた妙な想像を慌てて打ち切り、無理矢理思考を終了させる。
抱かれて変な気分になっているだけだ。相手はあの月島、合理的思考で動く規律の権化みたいな男だ。多少の罪悪感があったとしても、自分の車を放り出してまで俺を送る訳がない。きっと俺の車で一緒に帰るのが、最も合理的な手段だったのだろう。
（よし、今日はさっさと寝てしまおう。一晩眠れば少しはスッキリするだろう）
そして、俺は真っ直ぐベッドに向かい、着の身着のまま倒れ込んだ。先ほどまでうたた寝していたにもかかわらず、あっという間に眠りに落ちる。

その後。
結論から言ってしまえば一晩経っても全く気分が晴れることはなく。
せっかくの休日だというのに、一日中掃除をして気を紛らわす羽目になるのであった。

3

「なんて憂鬱な月曜なんだ」
結局、どんな顔で月島に会えばいいのか分からないまま休みが明けてしまった。
だから知り合いに抱かれるのは嫌だったのだ。こんなつまらないことで延々悩まされていては、何のために出会い系サイトを利用しているのか分からない。
しかし、悩んでいることを悟られたくはないので、俺は努めて冷静に、ただし絶対に月島と目を合わせないようにしながら自分のデスクへと向かった。
「おはよう」
「おはようございます。何だか、また朝から疲れてませんか？」
「別に。昨日気合い入れて掃除をし過ぎただけだ」
嘘を吐くときには、多くの真実に多少の嘘を紛れ込ませるのが基本である。
最近忙しくて部屋が汚れていたからと話を続けて話題を逸らすが、神原は納得いかない様子で考え込んでいた。
「顔色は良いのに、疲れてる……はっ、分かりました。彼女ですね？」
「黙れ」
当たらずも遠からずの結論に、自分でも思った以上に冷たい声が出てしまう。

どうしてコイツはこんな時だけ察しがいいのだろうか。神原は一瞬鼻白んだが、すぐに気を取り直して一層食らい付いてきた。
「やっぱり彼女ですか⁉　社内の子ですかね。ああ、この前給湯室でちょっと良い感じになってた子とか！」
「うるさい。黙って仕事しろ」
「教えてくださいよ、減るものじゃないですし」
ドスを利かせた声で脅しても、今更そんなもので神原は臆しない。新人時代などはすぐに口を閉ざしたものだが、耐性が付いたのだろうか。今まで多用してきたことが悔やまれる。何か新しい脅しを考えておこう。
余程、あそこで平然と座っている野郎に犯されたんだよと言ってやりたかったがあんな男と社会的に心中する訳にはいかない。
俺にできるのは、さっさとこの場から逃げ去ることだけだった。
「さて、打ち合わせの準備に行かなきゃな」
「やだなぁ先輩、準備なら僕も手伝いますよ」
「お前はこの後外回りだろ、大人しく座ってろ」
「仕方ないですね、また後で話を聞かせてくださいよ」
返事はせずに、ひらひらと手を振ってその場を後にする。
打ち合わせを終えて戻ってきた頃には、神原も月島もどこかへと出かけていた。

一息ついてパソコンに向かい、休日の間に溜まっていた仕事を片付けていく。メールを全て返信し、机の上の書類も数少なくなった頃には、時刻は昼を回っていた。

そろそろ昼食に向かわなくては。店が本格的に込む前に食事を済まそうとオフィスを出ると、タイミング良く帰社した神原と鉢合わせた。

「ああ、おかえり。お前も昼行くか？」

「篠崎先輩、大変です」

何の気なしに出迎えたが、向こうは妙に真面目な顔をしていた。嫌な予感がする。

「何があった？」

「ここではちょっと」

「よし、今日は外に行くか」

「はい」

押し黙ったまま、神原と連れ立って社外の食堂へと向かう。

俺の行き付けとなっている食堂は、奥まった立地にあるせいか、会社の人間にはあまり認知されていない。社内で話せないような相談をするにはうってつけの場所である。

念のため店内を見回して見知った顔がいないことを確認し、奥の個室スペースに陣取る。

注文したパスタが運ばれてきたのをきっかけに、「実は」と神原が口火を切った。

「月島さんに引き抜かれそうになりました」

「何⁉」

看過できない内容に腰を浮かせる。神原はそんな俺と目を合わせないまま続けた。
「そして僕はちょっと心が揺れています」
「薄情者！」
「冗談です」
思わず身を乗り出したところを、やんわりと押し返される。
冗談になっていない冗談に不機嫌さを露にすると、神原は意外そうな声をあげた。
「そんなに驚かれるとは思わなかったです。すみませんでした」
「そうか、お前は知らないのか」
「何をです？」
「昔の話だけどな」
椅子に座り直して、手持ち無沙汰にフォークを弄びながら過去に思いを馳せる。
まだ、俺と月島が『天敵』と呼ばれる前の話だ。
「俺が以前、職員研修を担当していたのは知ってるよな？」
「はい。僕も新人研修でお世話になりましたから」
「そこで俺は、研修ついでに将来有望そうなヤツを片っ端から取り込んでいたんだが……」
「うわ」
「まあ聞け。どいつもこいつも、独り立ちするや否や俺の下を離れていくんだ。どうしてだと思う？」

「篠崎先輩の横暴さに耐えかねてとか」
「真面目に話してるんだよ」
「僕も真面目に言ってます」
澄んだ神原の目が俺を射抜く。コイツは俺のことを一体どう思っているのやら。
問いただしてやりたいところだったが、やや形勢不利な気配がしたので深くは触れずに話を進めることにした。
「……とにかくだ、原因はあの男だったんだよ」
「月島さんですか？」
俺の言いたいことが伝わったのか、神原がパスタを食べながら神妙な面持ちを浮かべる。
「そうだ、育てたそばからアイツが引き抜いてたんだ。これは新採用に限った話じゃない。経歴も、能力も、社内外も問わず、俺が目を付けたヤツばかり粉かけていきやがる。一度面と向かって問い詰めたらこうだ、『私は彼らに合理的な選択肢を提示したに過ぎない。君に惑わされている姿を見過ごせなくてね』って確信犯だぞ、信じられるか⁉」
「いや、そこで月島さんが選ばれてしまうのも問題だと思うんですけど」
「まったく見る目のないヤツばかりだな！」
「僕の話聞いてます？」
別に全員が全員、月島の方を選んだ訳じゃないと呟こうとしたが、ただの負け惜しみにしかならない気がしたのでやめた。

気まずさを紛らわすためにパスタを口に運び、憮然とした表情のまま咀嚼する。黙って食事を続けていると、今度は神原の方が身を乗り出して俺の顔を覗き込んできた。
「もしかして、僕も月島さんに盗られちゃうと思って焦りました？」
「ぐ……」
痛いところを突かれて呻く。まったくその通りだったが、素直に認めるのは難しかった。
「答えが聞けたら、僕は絶対に裏切りませんから。ほらほら」
「……そう、だよ」
神原の言葉にそそのかされ、絞り出すように答える。
からかわれると反射的に身構えたが、俺の予想に反して神原はただ静かに微笑んでいた。
「良かったです。篠崎先輩に必要としてもらえて」
「え？」
「どうしようもなかったペーペーの僕を育ててくれたのは、篠崎先輩ですから。裏切る訳ないじゃないですか」
「神原……」
少しばかり後輩の評価を上方修正していると、そこで終わっておけばいいのに、神原は余計な話を続ける。
「それにしても、篠崎先輩にも可愛いところがあるんですね。そういう部分を出していけばもっと人が集まりそうなのに痛てて！」

「一言多い、お前は！」
放っておけば何を言うか分からない口を鷲掴みにすると、神原の悲痛な声が店に響いた。それでも懲りずに緩んだままの顔を睨みつけながら食事を平らげ、二人分の会計を済ませて店を出る。
「そんなに照れなくても」
「うるさい」
むず痒いような居心地の悪さに早足となってしまっていたが、神原が小走りについてくるのを見て歩調を緩めた。
シャツに付いたソースの染みを気にしながら隣を歩く神原を見て、しみじみと思う。
「神原。お前が非合理的な人間で良かったよ」
「……篠崎先輩も、一言多いですよね」
頑張って口に出してみた俺なりの褒め言葉は、呆れたように切り捨てられるのであった。

「月島、ちょっと面貸せ」
会社に戻った俺は、すぐさま月島を捕まえて手近な部屋へと引きずり込んだ。釘を刺すなら早い方がいい。
俺に腕を引かれた月島は少し驚いた顔をしていたが、あまり人目を引くことはしたくないのか、思いの外静かに着いてきた。

「お前、うちの神原にちょっかいかけるのやめろよな」
そう言うと、月島の眉がぴくりと動いた。神原が告げ口したことが気に入らなかったのか、心なしか不愉快そうな色を滲ませている。
「うちの神原、か。本当に気に入っているみたいだね。ますます奪いたくなった」
「あいつはお前なんかにつかないよ」
「そんなに自信があるのなら、わざわざ私に構わなくてもいいじゃないか。本当は不安で仕方ないのだろう？」
「飛んでる羽虫を追い払うのに大層な理由はいらないだろ。鬱陶しいんだよ」
月島が掲げた腕をまさしく羽虫のように叩き落とすが、意に介した様子はない。嫌味なほど涼やかな顔で肩をすくめるだけだった。
「そんなに殺気だった顔をしないでくれ。可愛い顔が台無しだよ、『とーる』君」
「――ッ！」
その名前を出された途端、頭に血が上るのを感じた。掴みかかりたい気持ちを抑えて、深呼吸する。相手のペースに乗せられてはいけない。
「『りょう』さんが酷い浮気性だったもんでね。俺の次は神原か、随分気の多いことだな」
「誤解だよ、私は見ての通り一途な男だからね」
「はっ、出会い系に登録してるヤツが言う台詞かよ」
月島の寝言を鼻で笑って切り捨てる。図らずも、今度は月島の逆鱗に触れたようだ。

月島の拳が強く握り込まれるのが目の端にとまったが、それも一瞬のこと。月島は少し目を閉じただけで、いつもの調子を取り戻していた。
「やれやれ、『とーる』君とは相性がいいのに聡君とは仲良く出来ないみたいだね」
「聡君はやめろ、気色悪い」
強烈なカウンターに怖気がして一歩下がる。全身に鳥肌が立っていた。
月島は動揺する俺を見て溜飲を下げたのか、背を向けて話を切り上げると、扉へと手をかけた。
「仕方ないから神原君からは手を引いてあげるよ。また別の手を考えるとしよう」
「勝手にやってろ。ただし、俺に迷惑が掛からないところでな」
そのまま出て行くかと思われたが、月島は肩越しに振り返る。その顔は髪に隠れてよく見えなかったが、ヤツには似合わない獰猛な笑みをたたえているように感じた。
「神原君からは……ね」
不穏な呟きを残して、月島は会議室から去っていく。
まだまだ、厄介なことが起こりそうな予感がした。

4

それから数日。予想に反して月島の動きは静かなものであった。

いや、静か過ぎると言ってもいい。口論も仕掛けて来なくなった件に対しては、もはや喜びよりも不気味さが上回っている。

しかし、せっかくストレスフリーな職場となったのだ。わざわざ藪をつついて蛇を出す趣味もない。理由を知りたそうな上司の目は見て見ぬふりだ。

そういう訳で、邪魔もなく非常に仕事が捗った俺は、完璧に仕上がったプレゼンの資料を手に、会議に向かおうとしていた。

「篠崎先輩、今夜は美味い焼肉が食べられるように頑張って下さいね！」

「そうだな、それじゃ行ってくるよ」

神原に見送られてデスクを出る。

月島も少し遅れて付いて来たようだが、話しかけてくる様子はない。いつもなら嫌味の一つ二つは飛んできそうだというのに、調子が狂う。

いや、今は余計なことを考えている場合ではない。目の前の仕事に集中しなくては。

「――以上が、私からの提案になります。ご質問はありますか？」

つつがなく自分の発表を終え、一息吐く。感触は今のところ上々だ。

しかし、まだ油断は出来ない。むしろここからが本番である。

いつもいつも、質疑応答に入るや否や月島の鬼のような追及が始まり、納得の色を浮かべていた聴衆に疑念の芽を植え付けていくのだから。

想定内の質問しかしてこないその他大勢を軽くあしらいながら、月島の発言に備える。
（今日は妙にもったいぶるな……？）
まだか、まだかと待っている内に、質問が途切れてしまった。
不意に流れた沈黙に、自然と全員の目が月島に集まる。
「……何でしょうか」
「いや、今日は質問をしないのかね？」
見かねた上司が話を振ると、月島はうっすらと笑みを浮かべた。
「ええ、問題ありません。皆様には彼と私の発表を、純粋に見比べて頂ければと思っております。そうしたら、自ずとどちらが優れているか明らかになることでしょうから」
「……」
仕事モードとは言え、無表情を装うのに顔中の筋肉を総動員する必要があった。
質問して粗を指摘するまでもないという意味だろうか。大層な自信である。
「……では、ご不明な点も尽きたようなので、プレゼンを終了します」
思わぬところで水を差されてしまったが、とりあえず締め括らなくてはならない。普段より声を張って終了を宣言すると、戸惑いの滲む拍手を受けながら演台を降りた。
続く月島の話は、その自信に見合う充分な内容だった。
しかし、完璧とは言えない。むしろ、普段より荒さが目立っていた。いつもなら先回りして潰されていそうな論点が、今日はそのまま流されている。月島らしからぬ脇の甘さだ。

だが、月島が俺に質問をしなかった以上、俺も口を出し辛い。自分の案に自信が無いから月島を叩いているという印象を抱かせかねないからだ。

むしろこれが目的だったのだろうか。準備が万全ではなかったから、ボロを出されないよう先んじて牽制をかけた？

いや、そうは思えない。俺なら迷わず使いそうな手だが、月島はあまり搦め手を好まない男だ。甘い顔をして、実は闘争本能が強いアイツは、真正面から叩きのめすことを是としている。

それでは何故、

「ん？」

気が付くと、周囲が静かになっていた。顔を上げれば、今度は俺が視線の中心となっている。先程の月島と入れ替わった形だ。

「篠崎、君も質問はしないのか？」

「ええ。言いたいことも聞きたいことも山のようにありますが、先程彼が言ったように、皆様のご判断にお任せします。指摘するまでもなく詰めの甘さが透けて見えていますから」

さっき水を差してきたお礼も込めて、最大限の笑顔で吐き捨てる。話しかけてきた上司は引きつった顔で、「そうか」とだけ呟いた。

ただならぬ事態に会議室中がざわめいている。それだけ、俺と月島の討論は恒例のものであった。

「賢明な皆様には合理的な判断を下していただけると信じています。以上で私のプレゼンを終わります」

月島がそう言って演台を降りると、室内のざわめきは次第に大きくなり、やがて各所で議論が始まった。

今までは俺と月島が徹底的に潰し合い、互いのメリット、デメリットを明らかにしていたが、今回は争点が整理されないままとなっているので、どちらの案が良いか判断しかねているのだ。

ざわざわとさざめく会議室の中で、俺と月島だけが静かに向かい合っている。その目には何の感情も映されておらず、いつもに増して何を考えているか分からない。しかし。

（今回の企画は、獲ったぞ）

月島が何に気を取られていようと関係ない。仕事がやりやすくなるなら大いに結構。

やがて、周囲が静かになった頃には、俺の案が採用されることに決まった。

5

「神原、肉だ。肉を食うぞ！」

「やった！　先輩、お疲れ様です！」

駅前の焼肉屋にて。

俺と神原は四人掛けの一角に腰掛けて、ハイテンションでビールをかち合わせていた。
「やっぱり仕事した後のビールは最高だな、今日は月島にも手こずらせられなかったから飯が美味くて仕方がない」
「いやあ良かったですね、馬車馬のようにこき使われた甲斐がありましたよ」
「まあまあ飲め飲め……」
愚痴をこぼす神原のグラスにビールを注いで黙らせる。お互い満杯まで注いだところで、特に意味のない掛け声を上げながらグラスを合わせた。
すでに今日、何回目になるか分からない乾杯だ。
ここ数日間のもやもやを振り払うように飲んでいるせいで、俺は早々に出来上がっていた。神原はまだ酔っていないはずだが、素のテンションが高いのでこの様である。
「それにしても月島さんの件は不思議ですね、何があったんですか？」
「それは俺も考えているんだが、さっぱり分からなくてな」
「心当たりが多過ぎて？」
「まあな。直近じゃお前に粉かけてきた件もあったし、嫌味や当てこすりは日常的過ぎて何を言ったかすら思い出せん。あ、すみませんカルビ一皿」
「嫌な日常ですね……タン塩も追加で、あとお酒も」
悩む素振りをしながらも、お互い箸のスピードは衰えない。酒と飯と話なら、最優先は飯だ。

良い色に焼きあがった肉や野菜を神原の皿に放り込み、自分も忙しなく口を動かしながら物思いに耽る。

神原には言えないが、先日のホテルでの一件もあるので、やはり思い当る節が多過ぎる。そもそも、あんな態度を取っている理由が分からないので推測するのが難しい。

俺となるべく関わり合いたくない雰囲気は伝わってくるのだが。

（いや、お前なんてこちらから願い下げなんだが）

自分の考えに自分で突っ込んでいると、店員が駆け寄ってくる音が聞こえた。程なくして暖簾がめくられ、肉と酒がテーブルに並べられていく。

「失礼します。カルビとタン塩、梅酒ロックとモヒートです」

「お、来た来た」

新しい肉を網に並べながら梅酒を一口啜ると、脂っこい口内が洗い流される心地がした。

機嫌よく野菜も並べ始めたところで、ふいに携帯が鳴る。

「あぁ俺だ。悪いな、少し出てくる」

「足元に気を付けてくださいね」

トングを神原に託し、ややふらついた足取りで店の外へ出る。画面に表示されているのは、猫宮という他部署の先輩の名前だった。

仕事の話だったので酔っていることを悟られないように話していたのだが、すぐにバレてしまった。謝罪の後、詳しい話はまた後日ということで、苦笑いと共に電話は終わった。

少し夜風に当たり冷静になって気付いたが、自分で思っていたよりも飲み過ぎていたようだ。酒は好きだが、ザルと言えるほど強い訳でもない。そろそろ控えなくては、明日の仕事に差し障るだろう。

ふらつく頭を押さえて席に戻ると、暖簾の奥にはバツの悪そうな顔をした神原と、招かれざる客の姿があった。

「せ、先輩……おかえりなさい……」

「やあ。邪魔しているよ」

「な、な、本当に邪魔だ！　今すぐ出て行け！」

「なんだ、つれないな」

月島亮介。避けられていると思っていた人間が、突如目の前に現れたのだった。

「……」

「何かな？」

「何の用か聞きたいのはこっちだよ」

先程まで俺が座っていた席は月島に占領されてしまったため、渋々神原の隣に腰かける。

一気に酔いの醒めた俺たちを尻目に、闖入者は悠々と梅酒を傾けていた。

「なに、大した理由ではないよ。偶然立ち寄った店で知り合いを見つけたものでね。挨拶くらいしておこうかと思って」

「一人で焼肉しに来るヤツがあるか。帰れストーカー」

「あっ、じゃあ僕お邪魔みたいなので帰りますね」
「待て、俺を一人置いてくな！」
『天敵』同士の険悪な空気に耐えかねた神原が腰を浮かしかけるが、すかさず腕を掴んで引き留める。こちらを向いた神原の顔には、「逃げたい」とはっきり書かれていた。
「絶対嫌ですよ、お二人の間に挟まれるなんて！」
「お前裏切らないって言っただろ！」
「これはちょっと保証対象外ですかね」
「コイツと二人きりにするなんて良心は痛まないのか！」
「その言葉そのままお返ししますよ……っ」
ぎりぎりと攻防を繰り広げる俺と神原を余所に、月島は平然と肉を焼いている。その姿を見て何だか馬鹿馬鹿しくなり、俺は神原を飯で買収してから一先ず腰を落ち着けた。
「……それで？」
「ん？」
「何の用だよ。聞いてやるからさっさと話してとっとと失せろ」
手元の酒を呷って気を取り直し、月島に向き直る。
キンキンに冷えた度の強い日本酒が喉を焼く感覚に思わず唸った。
（俺、日本酒のロックなんか頼んでたか？）
想定外の出来事に驚いたが、存外美味かったので良しとする。今度はちびりと舐めるよ

うにして、じっくりと味わいながら月島の言葉を待った。
　我が物顔で肉を食んでいた月島は、俺の問いかけも気にせず咀嚼を続けると、しっかり嚥下してから口を開いた。
「話ならもう終わったよ。そこの神原君に用があったものでね」
「ああ⁉」
　思いがけない返答に腰を浮かしかけるも、今度は神原が俺を引き留めた。
　しっかり釘を刺したにもかかわらず、また誘いに来たのか。問い詰めるように神原の目を覗き込むと、何故か気まずそうに目を反らされた。
「いや、篠崎先輩が心配しているような話じゃなかったんですけど」
「じゃあ何だったんだ」
「ちょっと、僕の口からは……」
「は？」
　神原に釣られて月島の方を見ると、我関せずと言った顔でピーマンをついばんでいた。
　お前の話をしているんだぞ。この男、マイペース過ぎやしないか。
「なんてことのない、つまらない話をしたまでだよ」
「……」
　神原は、何とも言えない表情をしている。
　コイツが俺に話せないということは、月島のプライベートに関わるような話だと予想は

つくのだが、内容は皆目見当もつかない。
「その顔はどういう意味だよ……」
「いつか月島さんから直接聞いてください」
「そんな日が来るとも思えないがね」
「……」
二人とも、梃子でも話す気は無さそうだった。
仕方がないので追及を諦めて飲み直す。酒でも飲んでいなければやってられない。
しばらく肉の焼ける音だけが響いていたが、そんな気まずい空気を壊すように店員が顔を覗かせた。その手には俺の好きな銘柄の一升瓶を抱えている。
そのまま置いて行ってしまったが、注文した覚えはない。薄っすら霧がかってきた思考でも、流石にそれは理解できた。
「あれ、俺頼んでないよな」
「私が入れておいた。邪魔をしてしまったせめてものお詫びだよ。さあ飲んでくれ」
言ったそばから月島はボトルを開け、こちらに差し出してくる。
物で釣られているような気がしたが、口を開けてしまった以上、飲まなくてはもったいない。俺は手元のグラスを空にすると、月島へと突き出した。
空のグラスはすぐに透明の液体で満たされていく。この男の酌で酒を飲むことには抵抗があったが、酒に罪はないので素直に飲み干すことにした。

期待どおりの美味さに自然と頬がほころぶ。現金な話だが、酒と肉を前にしては不機嫌も続かなかった。
「っああ、やっぱり美味いな」
「いい飲みっぷりじゃないか。どれ、もう一杯飲むといい」
月島に促され、すぐさま二杯目に取り掛かる。
徐々に酒に溺れていく俺を、神原が心配そうな目で見つめていた。
「せ、先輩？　ほどほどにしておいた方がいいですよ」
「神原君も遠慮せずに、ほら」
「え、いや僕は……」
「そう言わず飲んでみろって。お前、日本酒いけたよな？」
逃げ腰な神原を捕まえてグラスを握らせると、間髪を入れずに月島が酒を注ぎ込んだ。
神原は往生際悪く、「ここで酔いつぶれたら先輩が」などとよく分からないことを呟いていたが、徐々に誘惑に負けてグラスを口元へと近付けていく。
そして遠慮がちに一口啜ると、恍惚と天を仰いだ。
「美味しい……！」
「そうだろ、美味いだろ？」
「ああ駄目だ、美味しい……すみません先輩、お酒には勝てなかったです……っ」
神原は何故か罪悪感に苛まれながら飲み進めていく。それを不思議に思いつつも、理由

を考えるだけの思考能力は残っていなかった。
もし、俺が酔っていなかったらすぐに気付けただろう。
一升瓶を調子よく傾けている月島本人は、すでにグラスを持ってすらいないことに。

6

「……あ？」
気が付くと、タクシーに揺られていた。
隣には月島の姿も見える。眠りこける前のことを思い出そうとしたが、どうにも上手くいかなかった。
「起きたか。今、神原君を送り届けたところだ。君の家まではもう少しかかるだろう」
「そ……」
話している内に、ぼんやりと記憶が蘇ってくる。あれから散々飲んだ俺と神原は見事に酔い潰れ、月島の手によってタクシーに放り込まれたのだった。
ぐるぐると回る頭を抱えてうなだれていると、タクシーが停車した。
月島は会計を済ませ、俺を抱えて降車する。地面に足がついたので自力で立ち上がろうと試みたのだが、身体が言うことを聞いてくれなかった。
我ながらどれだけ飲んだのか。

結局、崩れ落ちそうになったところを月島に支えられ、そのまま抱え上げられてしまった。所謂、お姫様抱っこというヤツだ。
「随分と酒が回っているな。君がそんなに酩酊しているのは初めて見たよ」
「うう……」
恥ずかしさで文句を言ってやりたい気分だったが、運んでもらっている手前何も言えない。
「部屋は？」
「……五〇一」
「鍵は？」
「んー……」
回らない頭と舌では、部屋の番号を伝えるのが精一杯だった。指紋認証式のエントランスを抜け、エレベーターで五階まで上がると、部屋の前で一度床に降ろされる。
「失礼するよ」
鍵を探しているのか、月島の冷えた指が身体のあちこちをまさぐっていく。
極めて事務的な手付きだったが、嫌でもあの夜のことが思い出され、妙な気分になってしまいそうだった。
努めて無心でやり過ごそうとしていたが、胸ポケットに手を突っ込まれて、開きっぱなしの口から吐息が零れる。
「う、あ」

月島の手が一瞬止まる。
しかし、すぐに気を取り直したらしい。今度は内ポケットに手を突っ込むと、ようやく鍵を発見した。
月島は無言で部屋の鍵を開けると、再び俺を抱き上げる。そのまま玄関に放り込まれるかと思いきや、月島は靴を脱いで部屋の奥へと歩を進めた。
「寝室は……こちらか」
「ん……」
ご丁寧に寝室まで運び込んでくれるようだ。割れ物を扱うかのような慎重さでベッドに下ろされて、身を包む柔らかい感触に安堵する。
半ば無意識に布団に潜り込もうとしたが、脚を掴まれて動きを止めた。
「こら、靴を渡したまえ」
妙に優しい声色で叱咤され、俺は素直に足を差し出した。
俺の靴を脱がせた月島は、微かに笑って玄関へと消えて行った。今度こそ帰ったのだろう。そう思っていたのだが、再び足音が近付いてくる。
どうやら、もう少し世話を焼いてくれるようだ。
「さんきゅ……」
月島は、俺のシャツを寛げた後、ネクタイや上着、ベルトなどを次々と剥ぎ取っていく。
しかし、その手付きはお世辞にも手際が良いとは言えない。

俺は月島の意外な弱点を見つけた気がして小さく笑った。
「……不器用なヤツ」
「っ」
俺の何気ない一言で、月島は狼狽してベルトを取り落とした。それから逡巡して、遠慮がちに問いかけてくる。
「……手際が悪い、と？」
「ん？　あぁ。ネクタイ解くのにどれだけ時間かけるんだよ」
「――そうか」
けらけらと笑う俺を余所に、月島は何やら安心したように息を吐いていた。他にどんな意味があると思ったのだろう。
不思議に思ったが、俺の思考は唐突に走った快感によって遮られた。
見れば、月島が俺のスラックスに手をかけていた。ボタンが上手く外せず、布の擦れる感触が緩い刺激となっている。
「おまえ……ちょ、手……っ」
「動くな、すぐ外せるから」
「いいってば……！」
「スーツが皺になるだろう。……よっと」
力ない抵抗は軽々と抑えつけられ、スラックスが引き下ろされる。

露になった下半身は、下着越しにも反応を示していることが目に取れた。
「おや、感じてしまったかね？」
「うるせ、見んなよ……！」
蹴りの一つでもお見舞いしてやろうとしたが、スラックスが絡まって身動きが取れない。じたばたともがいてると、見かねた月島がスラックスを抜き取り、手近な椅子へと投げ掛けた。
そして、何故か自身も上着を脱ぎ、同じように椅子に投げる。
「月島？」
「それは私のせいなのだろう？　なら、私が責任をとろうではないか」
何をするつもりか考える間もなく、月島が俺の性器をかぶりと口に含む。そのまま音を立てて吸い上げられると、腰が浮くような快感に襲われた。
「あっ、ああ……！　そ、んな」
制止しようと試みるが、上手く言葉が出てこない。いつもは油を塗ったかのように滑らかに動く舌も、酒のせいですっかり鈍ってしまっていた。
喉の奥まで含まれると、抵抗しようという気勢まで削がれてしまう。酔いと快感に浮かされて、俺はいつしか与えられるままに快楽を享受していた。
「うあ、あぁ……うぅ」
同じ性を持つだけあって、月島は気持ちの良い箇所を正確に把握していた。あっという

間に上り詰めていくが、どうにもあと一歩のところで絶頂に辿り着けない。
月島の技量に問題がある訳ではない。飲み過ぎているせいだった。
そんな事情を月島が知る由もなく。一層激しく責め立てられるが、快楽はやがて苦痛に変わっていく。
「待て、月島ぁ、まって……ッ！　おれ、イけな……ああっ！」
途切れ途切れの抗議は全く取り合ってもらえない。快感を逃がそうと、靴下を履いたままの足でシーツをにじるが、無駄な努力に終わった。
イけそうで、イけない。もどかしい苦しみに視界が滲んでいく。
「い、や、やだ、やだぁ……！」
「……そんなに嫌がられると、興奮するからやめてくれないか？」
半ばぐずりながら月島の髪を握りしめていると、ようやく口が離された。
今の言葉は皮肉なのか本気なのか分からなかったが、とにかく今しかないと必死で事情を説明する。
「おれ……俺、酒飲んでるから、い、イけなくて……！」
「ああ、それでいまいち固くならなかったのか」
言いながら、月島が俺の性器の端を指ではじく。
一応勃ってはいるものの、まだまだ柔らかいそれはゆるりと振れた。
「……ッ」

小さな痛みに息を詰める。
俺の反応に、月島は意地の悪い顔をして、鞄の中から携帯用のローションとゴムを取り出した。
「気にするな。君が勃たなくても問題はない」
「てめぇ……」
あんまりな発言に牙を剥く。
月島は俺の視線を無視して、唾液と先走りによってぐちゃぐちゃになった下着を奪い取り、ぞんざいに後ろへ放り投げた。それから、ローションの封を切り、どろりと溢れた液体を直接俺の下肢へと滴らせる。
突然の冷たさに身を竦めると、微かな笑い声が聞こえてきた。どうやら確信犯のようだ。
文句を言ってやろうと口を開いたが、見計らったかのように秘部へと指を忍び込まされて、苦情は嬌声へと変わった。
「うあ、くっ……」
「どうした、何か言いたげだな」
「冷た、あ、うあ」
「よく聞こえないのだが」
「いっ、お、ま……わざとだろ……ッ！」
話を聞く気の感じられない指使いに、拳を握り締める。そっちがその気なら、こちらも

肉体言語で応じるまでだ。
力なく振るった拳はあっけなく避けられたが、言いたいことは伝わったらしい。月島は口先だけで怖がると、肩をすくめた。
「思ったより元気だね、結構飲ませたつもりだったが」
「あ……？」
何か今、聞き逃せないことを言ったような気がする。
送り狼。そんな言葉が脳裏によぎったが、浮かびかけた疑念は快感に流されていく。
ぐりぐりと前立腺を押し込まれ、口元からは唾液が零れ落ちた。
「あ、ああっ」
頭が真っ白になっていくような感覚に、背中を弓なりにしならせて喘ぐ。月島の長い指は、俺の中でばらばらに動いて快楽を生み出していくが、どうにももどかしい。
もう少し。いや、もっと強い快楽が欲しくて仕方がなかった。
「つ、きしまぁ……！」
もっと、と口の動きだけで伝えると、ごくりと生唾を飲み込む音が聞こえた。
感触を確かめるように、ぐるりと内壁をなぞってから指が抜き取られる。そして軽い金属音がしたかと思うと、火照った俺の身体よりも熱いモノが体内へ突き立てられた。
「あまり煽らないで欲しいと言ったのだが」
「う、あ、熱い……！」

「我慢してくれ」
堪らず声を上げるが、聞き入れてはもらえなかった。付いて行かない心とは裏腹に、慣らされた秘部は月島の欲望を易々と受け入れていく。身体の中を焼かれていくような感覚に目の前が明滅した。
やがて月島は自身を全て収めると、性急に律動を開始する。
「ちょっ……と、待てよ……！」
「我慢なら、もう充分しただろう？」
間近で囁いた月島の瞳はぎらぎらと輝いており、思いの外切羽詰まっていた。いつもと大差のないすました表情をしていながらも、その目と体内の熱が雄弁に物語っている。
欲しくて欲しくて堪らない、と。
こんな顔をさせているのは自分だと思うと、腹の奥がぞくりと疼いた。
「ははっ、余裕ない、な」
「そういう君は随分と余裕そうじゃないか、刺激が足りないのかね？」
そう言うと月島は、性懲りもなく俺の性器へと手を伸ばしてきた。
唾液で濡れたままの亀頭を撫でられると、忘れていた苦しみがぶり返してくる。
「あ、やめろ、や、イけないって……！」
「知っている、先ほど聞いたからな」
ふてぶてしく述べながらも、その手を止める気配はない。強引に引き剥がそうにも、腕

に力が入らなかった。
「な、ら、触るなよぉ……ッ」
「気持ちいいのだろう？」
「ちがっ……つら……」
「こら、あまり邪魔をするな」
抵抗している内に爪を立ててしまったらしく、月島が微かに顔をしかめる。責めの手が止まって苦しみから解放されたが、それも一瞬の事だった。
体内の熱が引き抜かれたと思うと、逃げる間もなくうつ伏せにひっくり返される。俺の背後に回った月島は、そのまま力任せに俺の腰を持ち上げて再び体内へ侵入してきた。
体勢が変わり、より奥まで犯される感触に息が詰まる。声にならない声を漏らしていると、不意に右腕を掴み取られて後ろ手に固定された。
嫌な予感がした時にはもう遅い。
「あっ、ひっ、触るなぁ……！」
身動きを封じられた状態で性器を嬲られ、なす術もなく身悶える。集中的に亀頭を擦られ、絶頂間近の快感に襲われながらも、決して達することはできない。
「あああッイけない、イけないから……ッ」
必死に訴えかけても手は緩まない。それどころか、嫌がる姿を見て興奮しているようにすら感じる。

「うあ、やめ、やめ……ろっ！　先ばっか……ぁ！」
「は……人に物を頼むときは、もっと言い方があるんじゃないか」
「……ッ！」
鬼だ。顔は見えないが、月島が悪魔のような笑みを浮かべていることは分かった。
ぐっと唇を噛み締めて黙り込むと、わずかに爪が立てられる。
「それとも、もっと虐めて欲しかったのか？　気が付かなくて悪かった」
「違っ、あああッ！」
忘れかけていた後ろの動きが再開される。ごりごりと前立腺を突き上げられ、もはや悲鳴に近い喘ぎ声が絞り出されるが、手心を加えてくれる気配はない。
月島は跳ねる俺の身体を押さえつけると、乱暴にシャツを引き下げて肩口に歯を立てた。
「ひ、ひいっ、ひあ……！　痛……っ！」
「満更でもなさそうじゃないか」
くっきりと残った歯型をぺろりと舐め、あちこちに所有の跡を残していく。随分と好き勝手しているが、そんな些細なことに構っていられるだけの余裕はなかった。
前からも後ろからも執拗に責められ、頭の中は快楽で一杯だ。零れ落ちる涙もそのままに、ただただ喘がされる。
悲鳴が泣き声へと変わっていくのに、それほど時間はかからなかった。
もう、限界だ。

「つき、しまぁ……ッ！」
「……何だね」
振り返って悪魔の名を呼べば、月島はややペースを落として聞く姿勢をとった。
「頼む……から、も……やめてくれ……！」
小さく懇願すると、月島は優しく微笑んでこう言った。
「嫌だね」と。
しばし、発せられた言葉の意味が理解できなかった。じわじわと月島の言葉が脳に染み込んでいくと同時に、顔が紅潮していくのを感じる。
……信じられない。
「う、嘘吐き……ひっ！」
「別に嘘を吐いてなどいない。私は君の態度を正しただけであって、」
そこで月島は一度言葉を区切り、歯を見せて獰猛に笑った。
「丁寧に頼めばやめてやるなど、一言も言っていない」
「〜〜っ！」
言葉も出なかった。とんだ外道である。
まんまと月島の手のひらで踊らされた悔しさに歯噛みするが、相手はいつまでも待ってくれるような男ではなかった。
「く、そ！　鬼畜野郎！　はなせ、んう……！」

「酷い言われようだな」
くすくすと軽く笑っている癖に、その動きに一切の慈悲は無い。
俺は掠れた声で悪態の限りを吐きながらも、すぐに追い詰められ、待ち望んだ絶頂に身を委ねた。
「んあ、あああッ！　ひっ、ひい……ッ！」
「っは、締まるな……」
全身を痙攣させて恍惚としていると、咥え込んだ熱も共に弾けるのを感じた。
これでやっと解放される。そう思ったが、未だ俺の性器を嬲り続ける月島の指に意識を引き戻された。
「ああ、あ、イったから……！　も……」
「こっちはまだ出してないだろう？」
「ひあ、ああ、ううぅ……ッ！」
これだけ蹂躙しても物足りないのか、達したばかりで敏感になっている全身を撫で回される。いつの間にか右腕は解放されていたが、シーツに縋りつくことしかできなかった。
強すぎる快楽に言葉を紡ぐこともままならず、それでも何とか苦しみから逃れたくて、ぐずる子どものように首を横に振る。
「うぐ、うう、うううっ……！」
「いい加減、酒も抜けてきただろう」

月島の言う通り、酔いも醒めてきていた。
しかし、上手く熱を放出できず、先走りばかりがぽたぽたとシーツに染みを作っていく。一体、この男は何処まで嬲れば気が済むのだろうか。
「あ、ぐ……！　――――ッ！　ひああっ、ああッ！」
やっとの思いで絶頂を迎えるが、焦らされていたせいか、なかなか波が引かない。月島の手の動きに沿って、次から次へと白濁が溢れ出してくる。
狂ったように嬌声を上げながら、延々と終わらない絶頂に恐怖を覚える。
「つき、しま、つきしまぁぁ……！」
「篠崎」
不安な気持ちに追い立てられ、縋るように月島の名を呼ぶ。情けない痴態を嘲笑われるかと思ったが、意外にも月島は優しく口付けてきた。
柔らかく触れるだけのキスが思いの外心地よくて、俺は目を閉じ、そのまま意識を手放した。

間　章　神原奏太の災難

篠崎先輩がよたよたと店の外に出ていくのを見送りながら、僕は機嫌よくトングを打ち鳴らしていた。

これは、「今からお前を食ってやる」という肉たちへの威嚇である。

頃合いを見て食材を裏返していると、ばさりと暖簾がめくられる音がした。

「ああ、おかえりなさ……」

顔を上げて硬直する。絶対ここにいてはいけない人が目の前に立っていたからだ。

「おやおや、そこにいるのは私の誘いを断った神原君じゃないか」

「え⁉　つ、月島さん、どうしてここに！」

制止する間もなく、月島さんは篠崎先輩が座っていた席へと腰かける。

その上、当然のように日本酒まで注文し始めた。このまま居座るつもりなのだろうか。

申し訳ないけれど、頼むから篠崎先輩が戻ってくる前にどこかへ行って欲しかった。

「月島さん、その節は悪かったんですけど……それより、今日は篠崎先輩と一緒に来てるんですよ」

だからさっさと隠れてくれ、そう続くハズだった言葉はしれっと流された。

「知っているよ。だから来たんだ」
「ど、どうしてですか……！」
とんでもない答えに声が裏返る。なんで仲が悪いのにわざわざ近付いてくるのだろうか。喧嘩を売りに来るとしても、僕のいない時にして欲しい。
「どうしても君に聞いておきたいことがあってね」
「何ですか？」
「君は、篠崎君のことをどう思っている？」
とても抽象的な質問だ。
しばし悩んで、とりあえず当たり障りない回答をすることに決める。
「どうって……一番お世話になっている先輩ですし、感謝してますけど」
「他には？」
「あー、仕事ができて尊敬してますし、憧れてもいますよ」
「それから？」
「えっ。後は……意外と優しいのに誤解されてるとか、素直じゃない人だなぁとか？」
思わぬ食い下がりように驚きつつも答えを捻り出すが、月島さんは僕の答えに満足していない様子だった。更に悩んでいると、日本酒のグラスが届けられる。
月島さんはそれを一瞥してから少し目を閉じると、硬い声で問いを重ねた。
「……単刀直入に聞こうか。篠崎君のことは好きかね？」

「そりゃもちろん、好きか嫌いかで言えば好きですよ。ですから、月島さんに付くつもりはありませんからね」

やや敵意を込めて月島さんを見据えるが、どうにも話が食い違っているような気がしてならなかった。一体何が聞きたいのだろう。

悶々と一人で悩んでいると、静かに爆弾が投げ込まれた。

「そこに恋愛感情は、あるかね？」

言われた言葉の意味が理解できず、一瞬固まる。

恋愛感情？　僕と、篠崎先輩の間に？

思わず篠崎先輩と付き合った未来を想像してしまい恐ろしくなる。

満面の笑みで僕と手を繋いで歩く篠崎先輩。……絶対に何か企んでいるとしか思えない光景である。

「いやいやいや、ある訳ないじゃないですか。僕は可愛くて守ってあげたくなるような女の子が好みなんです。殺しても死ななさそうな恐ろしい男性は守備範囲外ですよ！　それに篠崎先輩はそういう意味で好きになるにはやや人間性に問題があるよう、な……」

はた、と。そこまで言ってから固まる。あり得ない想像が頭に浮かんで仕方がなかった。

「……も、もしかして」

「その、まさかだ。私はね、篠崎君のことを好いているのだよ」

「いや、考え直した方がいいんじゃないですか」

驚きよりも心配が上回り、思わず真面目に諭してしまった。『あばたもえくぼ』という言葉もあるが、篠崎先輩はそんなに可愛いものじゃないと思う。

月島さん自身も、「そうなんだが……」と頭を抱えているところを見ると、思い当る節はあるらしい。

恋に盲目になっているというのなら、一発殴って目を覚ませてあげるのが優しさだろうか。早く正気に返った方がみんな幸せになれると思うのだけれども。

「それで、なんで僕にそんな話をするんですか」

「君にはこちらの事情を正確に伝えた上で、改めて協力を求めたいと思ってね」

「協力とは、具体的にどのような？」

「些細なことだよ。篠崎君がよく行くところや、好物なんかを教えてくれると助かる」

「うーん、それくらいなら……いやでも、篠崎先輩を売っている気分になるしなぁ」

別に悪くないような気もしたが、篠崎先輩があれだけ月島さんを嫌っている手前、月島さんと友好関係を結ぶのは憚られた。それに、うっかり話した内容が原因で、篠崎先輩が不利益を被るようなことは絶対に避けたい。

そんな僕の葛藤が月島さんにも伝わったのだろう、ふっと軽い笑い声が上がった。

「随分疑われているようだが、悪用のしようもない情報じゃないか。考えておいてくれると助かる。……そういえば、彼はこの酒が好きらしいね。そんな取り留めもないことだよ、私が知りたいのは」

月島さんは開きっぱなしのメニュー表に目を止めると、一番でかでかと取り上げられている酒を指差した。よく聞く銘柄だが、篠崎先輩が頼んでいた記憶はない。
不思議に思いつつも、何の気なしに訂正する。
「いいえ？　先輩が愛飲しているのはこっちの辛口のヤツですよ」
「……そうだったか」
僕が指摘すると、月島さんは少しばかり声のトーンを落として呟いた。メニュー表を指でなぞりながら、心なしか落ち込んでいるように見える。
「やはり、一番篠崎君のことを知っているのは君のようだ。私も、ただ彼の傍にあれたらいいのだが……随分嫌われているみたいだからね」
「月島さん……」
長い睫毛をそっと伏せた月島さんの目は、微かに潤んでいた。まさか『天敵』の片割れが、こんなに切ない思いを秘めていたとは。
「せめて、彼のことが知りたいんだ。好かれなくてもいい、でも、嫌われるのは辛い。ほんの少し、君の気が向いた時で構わない、助力してはもらえないか？」
「僕、は……」
心が揺れ動くのを感じる。
それでも僕には、どうしても篠崎先輩を裏切る真似はできなかった。
「僕には、やっぱりできません！」

「ふむ、そうか残念だ。君は泣き落としに弱いタイプだと思ったのだがね」
「はい？」
断りを述べた瞬間、月島さんの雰囲気がガラッと変わった。
先ほどまでのしおらしさは何処へかなぐり捨てたのか、いつもの悠々とした微笑を浮かべている。
騙された――そう気づくのに、さほど時間は要らなかった。
一体どこからが嘘だったのだろう。開いた口が塞がらないままでいる僕を余所に、月島さんは店員を呼びつける。
「すみませんが、こちらの銘柄を瓶でいただけますか？」
それは、先ほど僕が漏らした篠崎先輩の好きな日本酒だった。
「まさか……」
「ああ、そういえば礼が遅れていたね。有益な情報をありがとう、神原君」
悪びれもせず礼を述べられ、いつか篠崎先輩が言った言葉を思い出す。議論でもすればすぐに性根の悪さが分かると。なるほど、今はその言葉に同意しかない。
遠い目になる僕を肴に、月島さんはグラスを傾けていた。
それは月島さんが頼んでいた日本酒ではなく、篠崎先輩が飲み残していった梅酒の方ではないかと思ったが、指摘するだけの気力は残されていなかった。
「月島さん……案外、篠崎先輩とイイ線いくかもしれませんね」

「ほう、どうしてそう思う？」
「絶対同族ですもん。性根の曲がり方が一緒です」
月島さんは嫌味を受けて楽しそうに笑うと、それこそ篠崎先輩そっくりな不敵な笑みを浮かべた。
「それは光栄だ」
もうどうにでもなってくれ。
僕は心の中で匙を投げると、これから起きるだろう嵐を思って溜息を吐いた。

第二章　譲れない境界線

1

悪夢のような一夜が明け、嫌というほど眩しい朝日に叩き起こされる。渋々瞼を開いた俺は、しばらく呆然と宙を見つめていた。

少し顔を傾ければ、隣で眠りこけている憎々しい男の面が目に入る。朝からこの面を拝むのは不本意極まりなかったが、黙っていればそれなり以上に整った容姿をしているのだ。側にあって悪い気はしなかった。

思えば、いつも会社で顔を突き合わせているとはいえ、こんな至近距離で顔を眺めるのは初めてだ。改めて観察してみれば、長い睫毛に薄い唇、ほっそりした面立ちと、綺麗な顔をしているのが分かる。加えて長身な上、細身だがよく鍛えられている。

女も男も選り取り見取りだろうに、何を血迷って俺なんか抱いているのだろうか。いくら身体の相性が良いとはいえ、わざわざ嫌いな男を抱かなくてもいいのに。

いや、流されてとはいえ嫌いな男に抱かれてる俺が言えた話ではないか。深く考えるのはよしておこう。

「……ん？」

寝ぼけた頭でくだらない思案に耽っていたが、意識が覚醒してくるにつれ、謎の焦燥感

が湧いてくる。何故だろうと思ったのも束の間、すぐに原因に思い当たった。
今日、まだ仕事じゃないか。
飛び起きて時計を見ると、時刻は八時をとっくに過ぎていた。いつもなら身支度を済ませ、そろそろ出ようかと考えているような時間だ。
「月島！　起きろ、遅刻するぞ！」
「しの、ざき？　ここは……」
「俺んちだよ。お前、なに散々好き勝手した挙句眠りこけてるんだよ」
月島は状況が呑み込めていないようで、しぱしぱと目を瞬かせていた。
脱ぎ散らかされた衣服と乱れたシーツを目にしたところで、ようやく昨晩のことを思い出したようだ。納得の色を浮かべて身体を起こした。
「ああ、そうか。今何時だ？」
「八時過ぎだ、もうすぐ出ないと間に合わないぞ」
「な、何？」
俺の言葉に、月島も慌てて布団をかなぐり捨てる。昨晩、勝手にシャワーも浴びていたらしく、下着一枚の姿だ。そういえば俺の身体も知らない内に清められていた。こういうところは律義なヤツである。
「あ」
月島は床に放ってあった自分のシャツを手に取ると、小さく声を上げた。

「篠崎君。悪いが君のシャツを貸して欲しいのだが」
「俺のシャツだと小さいだろ、腹立つけど。昨日着たヤツだから嫌だとか言ってる場合か」
「いや、そうではなくて……昨晩君がだな……」
月島は歯切れ悪く言い淀むと、手に持ったシャツをこちらへと掲げた。
そこには見たことのある、かぴかぴとした白い汚れがこびりついていて――、
「勝手にしろ！」
「ぐっ……それはあんまりじゃないか？」
昨夜の恨みも込めて全力でシャツを投げ付けると、それを顔で受け止めた月島が恨めしげに呻いた。月島はじっとりとした目をこちらに向けていたが、遅刻寸前であることを思い出したのか、黙ってシャツを身に着けた。
やはりサイズが合っていないようで、肩や袖口が大変なことになっている。体格差を見せ付けられた気分で腹立たしい。
「結構苦しいな……」
「破くなよ、頼むから」
「善処する……」
月島は、おっかなびっくりという表現が似合う動きで身支度を進めていく。
そんな姿を視界の端に捉えながら、脱ぎ捨てられた衣服を洗濯機に放り込み、俺も自分の身支度を再開した。

会社に到着したのは、始業の鐘が鳴る直前であった。
珍しくぎりぎりに、しかも連れ立って現れた『天敵』二人組に、探るような視線が集まる。特に神原の顔は壮絶だ。
可能なら間を空けて到着したかったところだが、時間がそれを許さなかった。加えて言うなら、俺も月島も相手のために自分が遅刻してやるような玉ではない。
「お、おはようございます……篠崎先輩、遅かったですね」
「ああ」
「何かあったんですか？」
神原のその問いに、オフィス中が耳をそばだてている気配を感じた。いや、ただの好奇心から興味を示しているのならいいのだ。その辺の野次馬のように。しかし、神原には何かこう、確信を持って疑われているような気がした。
……やばい。
どうにも上手い返しを考えあぐねていると、月島が俺の背後から顔を出した。
「君の先輩を引き留めてしまってすまなかった。昨日のプレゼンについて少し話があったものでね、残念ながら建設的な話し合いにはならなかったのだけれども」
「……なんだ、まだやるのか？　俺も今後の準備で暇じゃないんだがな、お前と違って」
月島の助け舟に乗り、先ほどまで言い争っていたかのような体を装う。
そのまま嫌味の応酬を続ければ、集中していた視線の多くが興味を失い離れていった。

月島に助けられる形になったのは複雑だが、贅沢は言っていられないので良しとする。
「そ、そうでしたか、びっくりしましたよ。お二人とも遅かったので……」
全く納得のいってなさそうな顔で神原が笑う。とりあえず、この場は話を合わせてくれるらしい。だが、このまま有耶無耶にしてはくれないようだ。
月島も離れ、周囲の関心も他に逸れたところで神原が囁きかけてくる。
「篠崎先輩。今日のお昼、外で食べませんか……」
「あ、ああ……そうだな」
人を外食に誘うには些か暗すぎる神原の声に、これまた暗すぎる声で頷き、差し当たっては仕事に集中することで憂鬱な気分を紛らわせることにした。

「それで、実際のところはどうなんですか」
「何を疑っているか知らんが結論から言おう。何も無かった、以上だ」
いつもの食堂で個室に入り、料理が運ばれるや否や神原が問い詰めてきた。
最早疑いの目というか、早く本当のことを言ってくれと言わんばかりの目で見てくるが、俺は屈しない。
「朝、一緒に来ましたよね」
「会社の入り口で会って口論になったからな」
「今日は二人とも、いつもより髪のセットが甘いですよね」

「ワックスが切れ気味でな。アイツのことは知らないが」
しらを切り続けていると、次第に神原は言いにくそうに確信へと迫ってくる。
「篠崎先輩、今日は喉の調子が悪そうですよね」
「昨日、酒をしこたま飲んだせいだろ」
「月島さんから、篠崎先輩と同じシャンプーの匂いがするんですが」
「シャンプー変えたんじゃないのか。嫌な偶然だな」
「月島さんのワイシャツ、サイズ合ってないですよね。まるで人の物を借りたような……」
「洗濯忘れて着るものが無くなりでもしたんだろ」
「……」
「……」
神原には悪いが、ここは絶対に譲れない。いくら状況証拠があろうとも、苦しい言い逃れしかできなくても、俺が口を閉ざしている限り真実は闇の中なのだ。
痛いくらい刺さる神原の視線を、何食わぬ顔で受け流す。
「人の目を見ながらすらすらと嘘を吐けるのも才能ですよね……」
「人聞きが悪いな、俺は本当のことしか言ってないぞ」
神原の目を見て笑みすら浮かべてやれば、呆れたように溜息を吐かれた。
このままでは埒があかない。そう思ったのか、神原は意を決した顔をしてトドメの一言を放った。

「篠崎先輩……ッその、首の跡」
「――！」
思わず、昨晩噛みつかれた覚えのある個所を押さえる。鏡では見えなかったが、角度によっては襟から覗いてしまう位置だったのだろうか。
確定的とも言える俺の反応に、神原はこの世の終わりのような顔をして机に突っ伏した。そして、何故か謝罪を口にする。
「すみません先輩……！　僕が、僕が酔い潰れてさえいなければ……」
「何でお前が謝るんだよ。何も無かったし、万が一間違いがあったとしてもお前には関係ないだろ？」
この反応は予想外だった。自分が送って行かなかったから、可哀想な先輩が悪魔に食われたとでも思っているのだろうか。意外と義理堅い男である。
「いや、僕には止める義務がありました！」
「月島に何を吹き込まれたか知らないが、とにかくお前には何の責任もないよ。……何も無かったけどな？」
くどいくらいに念押しをしたが、嘆き悲しむ神原の耳に何処まで入ったかは疑問だ。ひとしきり神原の懺悔を聞き終える頃には、すっかりコーヒーも冷めきっていた。
「まったく、お前がそこまで気に病む理由は分からないが気にするな。俺もアイツもいい大人だし、何があっても自己責任だよ」

「でも……」
「いい、いい。そもそもお前を酔い潰したのは俺なんだから。加えて言うなら、酔い潰れるまで飲んだのも俺。それで俺に何かあっても自業自得だろ」
人を慰めるのは得意ではないので、上手い言葉が見つからない。それでも、何とか神原に気を取り直させようと腐心する。
月島に襲われたことについては、まあ気持ち良かったからいいかと気楽に捉えているのに、いたいけな後輩を深刻に悩ませてしまうのは申し訳なかった。
「その、なんだ。月島に痛めつけられたり、弱みを掴まれたりはしてないから、安心しろ」
強いて言うならプライドがやや傷付けられただけだ、とは胸の内だけで呟いておく。
「そう、ですか。……それなら良かった」
そこまで言えば、神原も自分の罪悪感と一応の折り合いを付けられたらしい。ようやく笑顔を見せてくれた。

2

懸念事項を片付け、すっきりした気分で会社へ戻った俺は、神原に見送られてデスクを後にした。
今日は先日のプレゼン結果を持って、財政担当と打ち合わせを行う手筈である。

担当者の名前は猫宮和樹。俺や月島とは違って万人受けするタイプの、いかにも人が良さそうな佇まいの先輩だ。歳は俺よりも七つほど上だっただろうか。

今の部署に異動してから、何かと接触が多く、世話になっている先輩だ。

ちなみに昨日、焼肉屋で電話をかけてきた人物でもある。その時に途中になってしまった話もしなくてはと考えながら廊下を歩いていると、件の人物が目に入った。随分気さくに誰かと話しているようだ。

「げ」

その話し相手が視界に入った瞬間、俺は近場の給湯室に飛び込んで身を隠した。

「おい亮介、手の傷はどうしたんだ？」

「ああ……昨夜、猫に引っかかれてね」

亮介と呼ばれるとピンと来ないが、この声を聞き間違える訳がない。もちろん悪い意味でだ。そっと様子を窺えば、月島と猫宮が立ち話をしていた。どうやら、俺が月島に付けた傷が話題に上っているようだ。

「お前が飼っているのは猫じゃなくて魚だろ」

「近所になかなか懐かない野良猫がいるものでね。手を出したら引っかかれてしまった」

誰が野良猫だ、誰が。

拳とともに突っ込んでやりたかったが、そんなことを言える訳もなく。居心地の悪い思いをしながら、話が終わるのを待つ他なかった。

手持ち無沙汰に資料を見直しながら二人の話を聞いている内に、会話は思わぬ方向へ進んでいく。
「……そうか。それじゃあ昨日の焼肉屋の件は上手くいった訳だ」
「ああ、カズのおかげだよ」
「神原の様子も探れたなら、せっせと調べてやった甲斐があったな」
なるほど。昨夜の件は計画的なものだと思っていたが、どうやって神原と二人きりになるタイミングを図っていたのかは疑問だった。何てことはない、協力者がいたのだ。
俺たちが焼肉にいることはオフィスでの会話を聞いて知っていただろうから、あらかじめ当たりをつけた店の付近で、月島が張っていたのだろう。
そして猫宮の電話によって店から出てきた俺と入れ替わる形で、神原の下へ向かったのだ。もしかすると、猫宮自身も近くに居たのかもしれない。
そういえば、人材育成を担当していた頃に、猫宮に関する噂を耳にしたような気がする。どうも前職が特殊だとか話していたが、詳しくは思い出せなかった。
「あ、そういえば。これから篠崎との予定があるんだよ。そろそろ行った方がいいぞ」
「そうするよ。またよろしく頼む」
気付けば約束の時間が迫っていた。猫宮に促され、月島が遠ざかっていく足音が聞こえる。その音が十分に小さくなった頃を見計らって、俺は何食わぬ顔で給湯室を出た。
猫宮和樹。まだまだ未知数だが、月島の仲間であることは間違いない。

俺は人の良い先輩という評価を改めて、要注意人物リストへとその名を刻んでおいた。
「猫宮さん、お待たせしました」
「よう、篠崎。ちょっと待っててくれ」
カウンターの外から声をかければ、人好きのする笑顔を浮かべて猫宮がやってきた。連れ立って打ち合わせスペースに移動し、今後の仕事について内容を詰めていく。
打ち合わせ自体はつつがなく終わったが、その後の雑談で俺は頭を悩ませることになる。
「なあ篠崎、お前のところに月島っているだろ。アイツ、実は俺と幼馴染なんだよ」
「……！　そうだったんですか」
初めて聞く話に目を見開く。道理で、あの月島がやたら親密にしていた訳だ。
「あんまり人には言ってないんだけどさ」
「俺も初耳でした」
「それで気になっているんだが……お前と月島の仲が悪いって話を聞いてな。実際どうなんだ？」
「そんなこと、俺に問うまでもなく噂で聞いてませんか。『天敵』同士だって」
「確かにその噂は知っているが、お前本人から話を聞いたことはなかったからな」
「……ふむ」
噂だけで物事を判断しない姿勢には好感を持てた。月島の仲間には相応しくない実直さである。

しかし、どう答えたものか。この話は間違いなく月島に伝わるだろうから、罵詈雑言の限りを尽くしてやりたい気分だったが、猫宮の前であまり幼馴染をこき下ろしてやるのも気が引ける。

俺の世間一般的な良心というヤツは、アイツ以外にはきちんと機能するのだ。

「それで、どうなんだ。率直な感想は」

「……月島とは意見も性格も合わないので、あまり得意な相手ではありませんね。色々とぶつかることも多いですし、できれば関わりを控えたいと思っています」

「そうか、アイツも悪い奴じゃないんだがな……」

「俺とは馬が合わないようでして」

丁重に、オブラートで幾重にも包んで思うところを述べる。

言いたいことの一割も話していなかったが、猫宮は心を痛めた様子で眉をしかめていた。

「ちなみに、どこが嫌いなんだ？」

「ほぼ全部ですかね」

まさか「顔と身体だけは嫌いじゃない」と言う訳にもいかず、上手い言葉を見繕えなかった。オブラートは早くも品切れだ。

猫宮は諦めたように天を仰ぐと、困り顔でこちらに向き直った。

「アイツもちょっと口が悪いところがあるからなぁ」

「ちょっと、ですか」

口を開けば立て板に水を流すように皮肉と嫌味を垂れ流すあの男を指して「ちょっと口が悪い」とは。身内の色眼鏡もここまでくると恐ろしい。

苦虫を噛み潰したような顔をしていると、猫宮は苦笑いを浮かべた。

「小さい頃には、カズ兄、カズ兄ってちょろちょろ後ろを付いて来て可愛かったんだぞ」

猫宮は幸せそうに話していたが、俺には全く想像がつかなかった。まず月島の幼少期が思い描けない。産まれた時から、あの底意地の悪い薄ら笑いを浮かべている気すらする。

「……そ、そうですか。想像つきませんね」

「今はちょっと擦れてしまったけどな」

「は、はぁ」

あの鬼畜野郎を指して「ちょっと擦れた」とは以下省略。

根が善良すぎるというのも考え物だ。猫宮の目で見ればあの月島も、ちょっとやんちゃな中学生と変わらなく見えるらしい。月島がそれなら、俺は聖人君子にでも見えているのだろうか。

「素直な感情表現があんまり得意ではないことは確かだがな。仲良くしてやってくれよ」

「え、ええ……考えておきます」

猫宮は無茶な注文を投げ付けると、自分のデスクへと去って行った。

何だか妙に疲れた。すぐには仕事に戻る気になれず、自販機で紅茶を買って適当に腰を下ろす。

「……」

少し、気になっていることがあった。

月島との会話を意地でも明かさない神原。月島に関して探りを入れてくる猫宮。わざわざ準備して用意周到に俺を酔い潰し、持ち帰った月島。着実に外堀が埋められている感覚がしていた。俺も鈍感と言われるような男ではない。

しかし、どうにも認めがたくて考えないようにしていた。

もしかして、月島は俺のことを……狙っているんじゃないか、などとは。

……いや、命を狙っているとか言われた方が余程しっくりくるんだが。

3

帰宅後、晩飯の仕度を終えた頃には辺りもすっかり暗くなっていた。

明日は休みだとのんびり構えていたら、少々気合いを入れて作り過ぎてしまったようだ。半分は明日の昼食にでもするとしよう。

「いただきます」

食卓に一人分の配膳を終え、ニュース番組を眺めながら遅い夕食を食べ始める。今日も我ながら良い出来だ。

自画自賛しながら食事をとっていると、不意にインターホンが鳴った。
こんな遅くに誰が、と考えたところで、一人の男の顔が思い浮かぶ。
「はい」
「篠崎君、私だ。その、シャツを返してもらいに来た」
「そうだよな。……入っていいぞ」
予想が当たってしまったことに溜息を吐いて、エントランスのオートロックを解除する。玄関のドアを開けて待っていると、エレベーターの到着を告げる音が鳴り、月島が姿を見せた。
「すまない、夜分遅くに」
「仕方ない、まさか会社でやり取りする訳にもいかないしな」
そんなことをした日には、職場の人間からどんな目で見られるか分かったものではない。特に神原。
俺に続いて玄関に入った月島は、何かに気付いた様子で興味深げに鼻を鳴らしていた。
「良い匂いがするな」
「晩飯の途中だったからな」
「ああ、そうか。邪魔をしてしまったね」
リビングまで先導すると、食卓を見た月島が感嘆の声を上げた。
「君は意外と料理上手なのだな」

「意外とはなんだ。見た目通りだよ」
適当に噛みつきつつ、洗濯機に入れたままになっていたシャツを引き出す。きちんと乾燥まで済んでいたが、どうにも皺くちゃだ。まあ、知ったことではないのでそのまま月島へと放り投げる。
案の定月島は渋い顔をしていたが、特に文句は言わずに受け取った。
「貸したシャツはこっちで洗うからそのままでいいぞ。さっさと着替えて帰ってくれ」
「ああ、すまないな」
追い払うように手を振れば、月島は困った顔をして着替え始めた。疲れのせいか妙に気怠げで色っぽい仕草をしていて、自然に目が引き寄せられてしまう。上着を脱ぎ、ネクタイを解いていく姿を見ていると、自分の視線に熱がこもっていくのを感じた。
そうだ。何だかんだ昨日は一度しか致していないのだ。恐ろしくねちっこく虐められただけであって。
月島はたどたどしい指使いでシャツのボタンを外していたが、俺の視線に気付いて手を止めた。
「そう熱烈に見つめられると、いささか居心地が悪いのだが」
「いや、別に……」
指摘を受けて目を反らしたが、どうにも気になって仕方がない。完全にスイッチが入ってしまっている。

そんな俺の様子に気が付いたのか、月島も熱を孕んだ瞳で俺の顔を覗き込んできた。
「実は私も、満足出来ていないのだ」
「月島……」
掠れた声で熱っぽく名を呼べば、向こうも完全にその気になったようだ。洗ったばかりのシャツを放り出して腰を抱かれ、至近距離で見つめ合う。
そっと月島の頬に手を伸ばせば、捉えられて手首にキスを落とされた。
「篠崎く……」
その時。何だか盛り上がりを見せた空気を霧散させるように、ぐうと小さな音が鳴った。
「……月島ぁ」
思わず気が抜けて崩れ落ちそうになる。批難の色が多分に交じった声を上げれば、月島は慌てて腹部を押さえた。
「し、仕方ないだろう。昼から何も食べていないのだから」
別に俺も、ムードがどうとか細かいことを気にするタイプではないのだが、流石に今のはひどかった。なまじ顔がいい分、がっかりさもひとしおである。
気まずそうに言い訳を並べる月島の姿に、ついつい笑いが込み上げてくる。
「ふ、はは」
「笑ってくれるな、生理現象だろう」
「はいはい、そうだな。仕方ないな」

「心がこもっていない」
むくれている月島というのも新鮮だ。何だかとても愉快な気分だった。今なら、ほんの気まぐれを起こして助けてやるのもやぶさかではない。
「しょうがないな、晩飯食って行けよ。多めに作ったからさ」
「いいのか？」
月島の目が吸い寄せられるように食卓へ向かう。相当腹を空かせていたようで、心なしか目が輝いている。完璧人間も所詮は人間。空腹には勝てないらしい。
まだまだ込み上げてくる笑いを抑えながら、月島の食事を用意していく。俺の真向かいに座るよう促せば、シャツのボタンを閉め直した月島が大人しく席へと収まった。
あの月島が、俺の家で食卓についているとは、まあ随分と異質な光景である。
俺が食事を再開したのを見て、月島も「いただきます」と手を合わせてから箸を取った。
「まさか君の手料理を食べる日が来るとは」
「俺も、まさかお前に手料理を振る舞う日が来るとは思ってなかったよ。いいからさっさと食え」
少しぬるくなった味噌汁を飲みながら月島の様子を窺う。月島は、一口味噌汁を啜った後、サバのみりん焼きに手を付けて弾んだ声を上げた。
「美味しいな」
「そりゃどーも」

その後もお浸しやポテトサラダに手を伸ばしては、逐一感動した声を上げる。随分と幸せそうに食べてくれるものだ。よっぽど手料理に飢えていたのだろうか。何にせよ、自分が作った料理を美味そうに食べてくれている姿は、見ていて悪い気はしなかった。

「お前、いつも飯とかどうしてるんだ」

「基本的に外食か、買ってきた物で済ましている。料理は……どうにもな」

「ふぅん。お前にも苦手なことがあったんだな」

何でもスマートにこなす完璧超人かと思っていたが、月島も人の子だったようだ。

「……塩を少々とか、適量とか言われても分らないのだ。仮にもレシピ本を謳うのなら、何グラムで何分何秒加熱するのか明記してほしいものだね」

「あー、なるほどなぁ」

たかが夕飯作りで計量器を持ち出して、グラム単位で材料を量る月島の姿が容易に想像できてしまった。おそらく感覚的な作業は苦手なのだろう。その四角四面さは月島らしいと感じた。

「ごちそうさまでした」

「はいはい、おそまつさまでした」

食事を食べ終えた月島が、手を合わせて一礼する。

そのまま食器を片付けようとするのを制止して、洗面所へと押し込んだ。

「皿は洗っておくから、お前はシャワー浴びて来いよ。俺はもう入ったから」

「何から何まですまないな、失礼する」
「あと服は洗濯機に入れておけ、夜の間に洗濯しておくから。どうせ裸で寝るだろ？」
「私が言えたことでもないが、ムードも何もあったものではないな……」
月島は複雑そうな顔をしながらも、言った通りに服を洗濯機へ放り込んでいく。程なくして聞こえてきた水音を背に受けながら、俺は片付けを再開した。
食器を洗い終わり、手持ち無沙汰にテレビを見始めたところで月島が戻ってくる。思えば、風呂上がりの姿を見るのはこれが初めてだ。
まだ髪を乾かしている途中らしく、タオルで乱雑に髪をかき回しては、時折鬱陶しげに前髪をかき上げている。様になっている動きに見惚れてしまった自分が悔しい。
普段は長めの前髪を横に流して整えているが、今はまばらに落ちた髪が顔に影を作っていた。前髪の間から覗く瞳を見ていると、らしくもなく心臓が跳ねる。
「……おや、君はこういうラフな髪型の方が好みかね？」
月島が手を止めてこちらへ歩み寄ってくる。その言葉に否定も肯定も返さないまま、俺は月島を寝室へと引っ張り込んだ。
今日も、長い夜になりそうな気がした。

「なあ、最初の話を覚えているか」
遅い朝食を取りながらそう切り出した月島は、心なしか硬い声をしていた。

「最初の話って？」
「君がサイトに書き込んでいた話だ。セフレを募集している、と」
「ああ……確かにそんなことを書き込んでいたな」
あの出会い系サイトでのやり取りは、半ば黒歴史として封印していたところもあった。思い出して頷けば、月島はしばし目を閉じ、再び口を開いた。
「あの話、改めて考えてみる気はないか」
「はい？」
「君と、私で、セックスフレンドにならないかと言っている」
「は？」
唖然として月島の顔を見つめる。潔癖そうなこの男の口から『セックスフレンド』なんて単語が出てくるとは思わなかった。
しばし二の句が継げずに固まっていたが、答え自体は一瞬にして固まっていた。
絶対無理、である。
「――無理。俺とお前で『フレンド』っていう響きが無理、ありえん」
「引っかかるのはそちらなのだな……」
「ほっとけ」
確かに『セックス』までは良くて『フレンド』が無理というのは珍しいケースだろう。しかし、こればかりは理屈じゃない。過去の確執を思うと、たとえ便宜上の名称だとして

も、月島との関係に『フレンド』なんて表現は用いられなかった。
何より、コイツと継続的な関係を持つ気はさらさらなかった。
確かに身体の相性がイイことは認める。少し、もったいないと思う自分がいることも認めよう。それでも、わざわざ進んで嫌いな男と関係を持とうとは思わない。
ここ最近の俺の精神力は、プラマイゼロというかややマイナス気味だ。性欲を満たすだけなら、適当に引っ掛けた男の方がマシである。
取り付く島もない俺の反応を見た月島は、元々無理を承知だったのか意外にもあっさりと引き下がった。
「分かった、ならば無理にとは言うまい。気が向いたら相手をしてくれると嬉しいね」
「はっ、そんな機会は訪れないだろうな。また誰かさんに酔い潰されでもしない限りは」
「……」
何を言われようと、月島との関係はこれっきりにするつもりだった。今日この部屋から追い出せば、終わり。二度と敷居を跨がせないと思っていた。
俺は不覚にも忘れていたのだ。月島という男の執念深さを。

「――こんばんは。邪魔するよ」
俺の決意とは裏腹に、月島は次の日も、その次の日も俺の部屋に足を踏み入れていた。
その理由は、頻発した忘れ物にある。

「シャツを忘れて、ネクタイを忘れて、時計を忘れて……今日は何を忘れたって言うんだ、おい」
「ああ……忘れ物しておくのを忘れた」
悪びれもせず言われれば、最早噛み付く気力も残らなかった。コイツは俺が関係を受け入れるまで、いくらでも纏わり付いてくるつもりだろう。
……根負けである。
俺はこれ見よがしに大きな溜息を吐くと、今日も月島を部屋に招き入れた。
「分かったよ。今回は、お前の粘り勝ちということにしておいてやる」
「光栄だね」
我が意を得たりと言わんばかりの表情を見ていると腹立たしさしか湧かず、今後が思いやられる。
せめてもの反攻に思いっきり嫌な顔をしてやれば、月島はますます笑みを深めて、慣れた足取りで俺の部屋へと上がり込んで来るのであった。

4

夏の日差しも少し和らいできた頃、俺は夕陽の差し込む寝室で一人物思いに耽っていた。月島についてである。

差し当たって何か問題があった訳ではない。月島に根負けして協定を結んだあの日から、俺たちは、週に一度会っては寝るという関係を続けていた。

協定というのは、俺が一方的に押し付けた約束事の数々である。一つ、連絡は必要最低限に留めること。二つ、互いの私生活には干渉しないこと。三つ、夜の生活にも口を出さないこと……等々。

ここぞとばかりにたっぷり注文を付けてやったら不服そうにしていたが、これがセフレになる絶対条件だと断言すると、何も言わずに受け入れた。

それから二ヶ月以上、大きな衝突も無く関係は続けている。それが如何に順調かは、俺の部屋を見渡せば一目瞭然だ。

「アイツ、また荷物増やしたな？」

部屋のあちこちでは、いつの間にか持ち込まれた月島の私物が我が物顔で鎮座していた。寝室の枕も、洗面所の歯ブラシも、食器もいつの間にか増やされており、今もベランダにはサイズの違うシャツが並んで干されている。では、何を悩んでいるのか。

問題が無さ過ぎるのだ。

月島との関係に満足してしまっている現状が受け入れられなかった。思えば、せっかく相互不干渉としたにもかかわらず、ここ最近は月島としか寝ていない。

それが妙に落ち着かなかった。理由は、分からないのだが。

（何で月島は嫌なんだろう。気持ち良くなれて、都合が良ければ誰でもいいじゃないか）

今まで、特定の相手と長期間関係を持ち続けた経験が無い訳じゃない。長い時には一年くらい同じ相手と寝ていたときもある。馬の合いそうな相手を探すのも楽ではないのだ。むしろ、都合が良ければ関係を維持するように動いてきた。その時には、こんな抵抗感など覚えなかったのに。

（やっぱり嫌いな男だからだろうか？　それも今更な気がするけど……）

いくら考えても答えは出そうになかった。それに、うじうじ悩んでいるのも俺らしくない。とりあえず、気分転換がてら月島以外の相手と寝てみるとしよう。そう決めて、月島に「今週はパス」とだけメールを送ってパソコンを立ち上げた。

この時、原因不明の焦燥感に苛まれていたことは間違いない。その結果、俺は見極めもそこそこに、適当な相手と約束を取り付けてしまっていた。

僅かに躊躇いを覚えたが、引っかかるものを無視してパソコンを閉じる。大丈夫だ、もう何年もサイトを利用しているが、トラブルに巻き込まれたことはない。

――だからと言って、次も大丈夫とは限らないのに。

私生活では大きな変化のあった俺と月島の関係だが、こと会社においては驚くほど何の変化も無かった。

セフレにならないかと言われた時には、どんな顔をして会社で会えばいいのかと悩んだものだが、一方の月島は、夜のことなど無かったかのように平然としていた。

素直に感心してしまうほど凄まじい割り切り方である。前に公私混同しないタイプだと匂わせていただけはあるということか。

そういう訳で、俺たちは今日も変わらず、ぶつかり合う日々を送っていた。

「君は付き合う相手をきちんと考えた方がいい。その取引先はあまり業績も素行もよろしくない、信用するに足らない会社だと思うが」

「どこの会社も叩けば埃の一つくらい出るだろ。うちとの取引では過去に何も問題を起こしていない上に、最短納期がこの会社なんだ。少し不安要素があるだけで棄てられるか」

「それは拙速と言うのだよ、リスクは避けて着実に進行するべきだ」

「他社に先を越されてもか？　すでにライバル会社が動き出しているんだ。慎重と愚鈍は違うぞ」

「迅速と軽率も違うということを知った方がいい。特に君はね」

「はっ、ご高説痛み入りますね。ところで忙しいので仕事に戻ってもいいですか？」

今日も今日とて飽きず懲りず、月島と顔を付き合わせて睨み合う。

やはりコイツとは、根本的に考え方が合わなかった。

「私だって忙しいのだ、これだけ説明しているのだからそろそろ理解してくれると助かる」

「俺の反論もそろそろ聞いてくれると嬉しいね、その耳が飾りじゃないならば」

「……君に道理を説くのは酷く骨が折れるね、ここは上司の判断を仰ぐべきかと思うが」

「それは俺も賛成だ、石頭にも染みる言葉を探すのは難しいからな。時間の無駄だ」

「課長」
「課長」
月島と口を揃えて振り返れば、非常に嫌そうな顔をした課長と目が合った。俺に振るなと言わんばかりの表情だが、そんな主張は俺も月島も揃って黙殺する。
やがて課長はうんうん唸って悩んだ結果、ゆっくりと俺の方を指差した。俺はそれに満面の笑みで応え、月島へと向き直る。
「……だ、そうだ。分かったら席に戻ってくれ」
「ふむ、今回はスピード感を重視されているようだね。ならばもう何も言うまい、君の浅慮な判断でプロジェクトに懸念が生じるのは心苦しいところだが、そのリスクを理解させるだけの説明が私にはできないようだ。己の力不足を恨むばかりだよ」
何が「何も言うまい」だ。充分過ぎるほど喋っているではないか。
もう一発ほど返してから仕事に戻ろうと考えたところで、ずっと黙ってやり取りを聞いていた神原が辟易した様子で口を開いた。
「お二人とも嫌味抜きで話し合えないんですか……」
溜息交じりに呟いた神原は、うんざりとした表情を浮かべている。そりゃ自分が仕事をしている隣で言い争われたらさぞ迷惑だろう。だが、乗っからせてもらうとする。
「おっと神原、お前もなかなか言うな。流石の俺も月島に死ねとまでは言わないぞ」
「はい？」

「コイツにとって嫌味は呼吸と変わらないからな。もし嫌味が言えなくなったら窒息死するぞ」
「ほう、その理屈が通じるなら悲しいね。君の方が早死にしそうだ」
「あぁもう、僕までダシにしないでくださいよ……」
神原は諦めた表情で机に突っ伏した。流石に可哀想になってきたので、この辺でお開きにしておくとしよう。会話を断ち切るために受話器を手に取ると、向こうも肩をすくめて自席に戻って行った。変わらなさ過ぎる、嫌な日常である。
わだかまった気持ちが晴れるには少し時間を要しそうだったが、件の取引先と今後の道筋を付け終わった頃には頭も冷えてきていた。
「巻き込んで悪かったな」
一言詫びて、神原に菓子を差し出す。神原はまだむくれていたが、菓子を受け取るとすぐに口へと放り込んだ。
「まあ、いい加減お二人の言い争いにも慣れてきましたけどね。ところで一つ気になったんですけど」
「なんだ？」
「月島さんとの距離、近過ぎませんか。その、物理的に」
「……まじ？」
指摘されるまで気が付かなかったが、確かに思い返せば睫毛が数えられそうなほど顔が

近かったような気もする。
いまいち認めきれない俺に、神原は重々しく頷いた。
「まじです」
「あー……気にするな」
どうやら何も変わらないと思っていたのは当人だけだったようだ。また疑惑が再燃しても堪らない。せいぜいぼろを出さないように気を付けるとしよう。

なんて決意をした日の夕方のことだ。
俺が何か決断をした時、もれなく邪魔をして来るのが月島亮介という男だった。まるでエスパーの如く。俺は自分の思考が読まれているのではないかと気になって仕方がない。
そんな益体の無いことを、俺は月島に肩を抱かれながら考えていた。
「……」
隣には月島。目の前には久しぶりに会った同期。
どうしてこんなことになったのか。時は十分前に遡る。

「そこにいるのは篠崎か？　久しぶりだな！」
「ん？　……保坂じゃないか、戻ってきてたのか！」
俺は休憩がてら、ラウンジで紅茶を飲んでいるところだった。

そこに懐かしい顔がやってきたのである。同期の保坂だ。
保坂とは新人研修で同じチームになった縁もあり、入社当初から良い関係を築いていた。三年前に保坂が子会社へ出向してからというものの、少し疎遠になっていたが、元気にしていたようである。
「今年からまた本社でやることになってな。広報担当になったからあんまり関わりはないかもしれないが、よろしく頼むよ」
「へえ、広報か。面白そうな話があったら教えてくれよ。あと使えそうなヤツとかもな」
「そういうところ、変わってないな」
冗談交じりに述べれば、保坂は苦笑いを浮かべた。
話を聞いた中では、子会社でも同じノリで周囲に溶け込んで仲良くやっていたようだ。人材交流を終えて本社への帰還が決まった際には、連日送別会に呼ばれて嬉しい苦労をしたという。
「たった三年とはいえ、本社も様変わりして見えてなぁ。気分は浦島太郎だよ」
「なんだ、心細いのか？」
「それはもう、構ってくれなきゃ寂しくて死ぬぞ？」
「お前が言っても可愛くないからやめろ。この三年間は色々あったな。例えば……」
誰が結婚しただの、どこの部署に誰がいるだの、ここ最近の情報交換をしていたら時間が経つのはあっという間だった。

まだまだ話し足りなかったが、もうすぐ猫宮との約束がある。俺は名残を惜しみつつも、話を切り上げることにした。
「悪い、俺そろそろ行かなきゃならないんだ」
「そうか、また近い内に飲みにでも行こうぜ」
断りを入れて立ち上がった俺の背中を、保坂が親しげに叩く。
異変が起きたのはその時だった。
「！」
不意に、何者かに強く引き寄せられる。ぐっと肩を握り込まれる感覚に驚いて振り返れば、月島が恐ろしい形相で保坂を睨みつけていた。
月島は、あまり感情を見せない男だ。これほどあからさまに激情を浮かべている姿は、散々月島を怒らせてきた俺ですら見たことがない。
「……っ」
誰も二の句が継げずにいると、月島は一度表情を失い、そしてゆっくりと目を見開いて俺を見た。その口は、無意味に開いては閉じてを繰り返している。
にわかには信じ難いが、衝動的な行動の結果、始末に困っている様子だった。コイツが我を忘れるとは、明日は雨に違いない。
「つき、しま?」
静寂を破ったのは、怯えの滲む保坂の声だった。

……さて、この気まずい空気をどうしてくれようか。
不本意ながら月島には借りがある。神原への返答に詰まった際に口添えを受けた件だ。
ここは一つ、それを返してやるとしよう。
「悪いな、ちょっと立ちくらみを起こしたみたいだ。支えてもらって助かった」
「……あ、ああ。気を付けてくれ」
適当に理由を付けて身を離せば、向こうも察して話を合わせてくる。
「じゃあな、保坂。また今度」
俺はまだ戸惑っている保坂から逃げるように猫宮の下へと向かった。その足取りはいつもより早い。妙な高揚感と動悸が不愉快で、許されるなら走り出したい気分だった。
激情を剥き出しにした月島の顔が、脳裏にこびりついて離れない。
「よう、篠崎。時間ピッタリだな……って、どうしたんだ？」
猫宮は俺の顔を見るなり目を丸くする。その声に引き寄せられた周囲の人間も同じように驚きを滲ませていた。
「な、何がですか」
「自覚ないのか？　顔、真っ赤だぞ」
猫宮に指摘されて頬に手を当てる。熱い。
絶句した。
違う。絶対に違う。

これは急いで来たからであって、月島とはなんら関係のない現象だ。俺と月島は『天敵』同士、身体だけの関係なのだから。

そう。特別な人間は、二度と作らないと決めたのだ。

「実は、遅刻しそうになって走ってきたんです」

「おいおい、お前でもそんなことがあるんだな」

猫宮はさして疑わず俺の言葉を信じ、呆れたように笑った。

俺も同調して曖昧な笑みを返す。そして大きく深呼吸してから、猫宮の後に続いてその場を離れた。

第三章　天邪鬼の逃避行

1

週末の夜。俺は会社を後にして、家とは逆方向の電車に揺られていた。
乗車前に駅前のカプセルホテルでシャワーを浴びてきたので、車内の少し強めの空調が心地よい。火照った身体を冷ますため、ネクタイを引き抜いてシャツの首元をくつろげる。篭っていた熱気が抜けていく清涼感に、思わず溜息が漏れた。
『まもなく駅に到着します。降車される方は――』
目的の駅に降り立つと、アスファルトと人混みの熱が全身にまとわりついてきた。相手からの連絡はまだ来ていないが、この熱気の中で待つのも気が滅入る。
「……先に行って待ってるか」
駅を出て、スマホを頼りに最寄りの公園へ向かう。木々が生い茂り月明かりも届かないこの公園は、外灯もまばらで、一人で歩くのは心許ない。しかし、秘密の待ち合わせにはうってつけだった。
暗がりの中、ポツンと照らされたベンチに腰掛けて連絡を待つ。
「七時半まで……あと十分か」
手持ち無沙汰にスマホを眺めていると、どうしてもあの男の顔が思い浮かんでしまう。

月島は今頃、何をしているのだろうか。
ここ最近、週末は月島と過ごすのが日常となっていた。今日も本当なら月島と会って、一緒に食事でもしていた筈である。すっかり、夕食を一緒に食べる習慣までついてしまっていた。月島は料理が苦手だと言っていたが、今日は一人、自宅で出来合いの弁当でも食べているのだろうか。
「……」
浮かんでしまった想像を振り払うように、乱暴に汗を拭う。
俺は何も悪いことをしていない。月島とは付き合ってもいないし、事前に私生活には相互不干渉だと釘も刺してある。それを向こうも了承したのだ。
だが、どうにも後ろめたい気分は拭えなかった。
何故か。
月島の方は、ただのセフレだと割り切っていないことを薄々察しているからだ。
本人は隠しているつもりらしいが、あれほど熱烈に抱かれていれば嫌でも気付く。視線一つ取っても、俺に好意を抱いているであろうことは容易に把握できた。
分かった上で、ここに居るのだ。月島から逃げるように。
それでも、本当に悪いことをしていないと言い切れるのだろうか。
「……っ！」
不意にスマホの通知が鳴り、意識を引き戻される。

相手が公園に着いたようだ。今更、約束を取り止める訳にもいかない。浮かびかけた疑念に蓋をして、相手にメールを送り返すと、一人の男が近づいてきた。
「遅くなりました、『とーる』さんで間違いないっすよね？」
「ええ。今日はよろしくお願いします、『アズマ』さん」
やってきた男は、ラフな出で立ちにリュックを背負った軽薄そうな男だった。髪を明るい茶色に染めて、耳にはピアスを開けている。年齢は俺と同じか少し下だろうか。
いつもと違うタイプの男を選んでみたが、これは少し思い切り過ぎたかもしれない。
ただ、月島の顔は思い出さずに済みそうだった。
「こちらこそ、どーぞよろしく」
「……」
躊躇いを押し殺し、差し出された手を握り返す。
どうせ一晩の付き合いなのだ。せいぜい楽しむことにしよう。

予約したビジネスホテルは、町外れにひっそりと佇んでいた。
「それにしても暑いっすね、夏も終わりだっていうのに」
「来週には涼しくなるらしいですけど、参りますよね」
取り留めのない会話をしながら部屋に入り、上着や鞄をソファの上に放る。そのままシャツも脱ぎ掛けたところで、アズマが制止の声をかけてきた。

「すみませんけど、ちょっと一休みしてもいいっすか？　喉渇いちゃって」
「ああ、大丈夫ですよ」
この熱帯夜では無理もない話だった。俺が了承を返すと、アズマは備え付けのコップを二つ並べて向かいのソファへと腰かけた。
おもむろにリュックを漁り、ペットボトルの緑茶を開けてコップに注いでいく。そして片方を俺に差し出すと、自分の分を半分ほど飲み干して一息吐いた。
そこまで喉は渇いていなかったが、受け取ってしまった以上、飲まないのも悪くて口を付ける。
いつも紅茶ばかり飲んでいたため、久しぶりに飲んだ緑茶はやけに苦く感じられた。
「とーるさん、シャワー浴びます？」
「いや、私は済ませてきましたので」
「そうしたら少し汗を流してきます。せっかく準備してきたのにもう汗だくで。すぐ出てきますから」
「ええ、お構いなく」
そして、アズマは風呂に続く扉の先へと消えていった。
残された俺は、手持ち無沙汰にスマホを取り出す。画面には月島からの着信履歴が表示されていた。恐らく、今晩の予定について再確認するために電話をかけてきたのだろう。返信しておくか悩んだが、結局何もしない内にアズマが戻って来てしまった。

「お待たせっす」
首にタオルを巻き、下着を身に付けただけの姿だ。少々だらしないが、これからすることを思えば不思議は無い。
俺もソファから立ち上がり、シャツのボタンを外していく。ベッドの端に腰掛ければ、熱っぽい目をしたアズマに押し倒された。
誘うようにその背に手を回そうとしたその時、不意に薬品の臭いが鼻腔を掠める。
「――ッ！」
それを不審に思う暇もなく、アズマがタオルを俺の口元へと押し付けてきた。じっとりと濡れたタオルの感触と、濃厚な薬品の臭いに身の危険を感じて息を止める。すぐさま跳ね起きようとしたが、体勢が苦しくて力が入らなかった。
腕を引き剥がそうにも、体重をかけられていて身動きもままならない。いよいよもって危うい状況に、嫌な汗がどっと吹き出した。
（まずい、やばい……っ！　いや、落ち着け！）
パニックに陥りかけている頭を理性で無理矢理抑え付け、一度冷静に相手を観察する。アズマは俺の反撃を警戒して身体を密着させていたが、自分まで薬品を吸い込んでしまわないように顔だけは離していた。
狙うべきは顎だ。迷わず全力で拳を突き上げる。
「ぐあっ！」

「ど、けよ！」

相手の体勢が崩れたところでタオルを毟り取り、勢いのままベッドの下へ蹴り落とす。身体の自由は取り戻したが、まだ窮地を脱したとは言えない。

拳の当たりが浅くて気絶させられなかった上に、何を吸わされたのか知らないが、頭に靄がかかるような感覚がしていた。

「よくも殴ってくれたな、この野郎……！」

「自業自得だ、犯罪者」

逆上したアズマが雰囲気を一変させて掴みかかってくる。しかし、その動きは素人だ。十分対処できる。そう思ったところで、洗面所から別の男が顔を出した。

「何しくじってんだよ！」

アズマの仲間らしき男は、俺を羽交い締めにしようと加勢してきた。しかも仲間は一人ではないらしい。一人目を殴り、二人目を蹴り飛ばし、三人目が出てきたところですぐさま踵を返した。二人ならどうにかできる自信があるが、三人相手にした場合の勝率は微妙なところだ。

「クソ野郎ども……！」

俺は上着と鞄を引っ掴んで近くの窓に取り付くと、迷わず外へと身を躍らせた。

幸いにもここは二階。それでも常人なら身の竦む高さだが、この程度の高さなら何度も飛び降りたことが――、

「……ッ」

ある、のだが。

身動きの取りづらい服装だったことが災いして着地が乱れる。咄嗟に転がったが、それでも衝撃を逃がし切れず右足首に嫌な感触がした。

社会人になってから喧嘩もしなくなって久しい。随分と勘が鈍っているようである。

しかし、己の運動不足を嘆いている暇はない。すでに背後では、騒がしい気配が追って来ていた。二階程度を飛び降りたところで、非常階段でも使われればすぐにでも追いつかれてしまう。その上、痛めた足と薬の効いた身体では、何処まで逃げられるか疑問だった。

「ああ畜生、最悪だ。出ろよ、出てくれよ」

人気のない道を走りながら電話をかける。相手は……月島だ。

事が事だけに他に頼れる選択肢は無く、なりふり構っている余裕もなかった。己の人脈の狭さを嘆きたくなってくるがそんな暇もない。

必死の祈りが通じたのか、三コール目で電話が繋がる。

「篠崎君？　今日は、」

「月島、悪い。助けてくれ！」

切羽詰まった声で叫んだ瞬間、電話の向こうで息を飲む音がした。

「何があった？」

「色々あって追われてる、すまないが迎えに来てくれないか」

「……場所は？」
通り過ぎざまに目に入った住所を片っ端から伝えていく。三つ、四つほど伝えれば、月島も概ねの場所と進行方向を掴んだらしい。
「そのまま真っ直ぐ進んで、突き当たりは右に曲がれ。十分で着く。銀のセダンだ」
月島は必要な情報だけ手早く伝えると、電話を切った。
（十分、か……）
思っていたより早い到着だが、焦りは増す一方だった。先ほどから嫌な感覚がしているのだ。走ったせいか薬の回りが早く、何度目をこすっても視界が晴れない。
それでも走り続け、月島の指示通りに突き当たりを右に曲がる。
「はっ……畜生」
まだ距離はあるが、背後から車のエンジン音が聞こえていた。
どうしてこんなことに、などとは考えるまでもない。全ては自分の軽率さが招いた事態だった。もう少し慎重に相手を見極めるべきだった。変な意地を張るんじゃなかった。反省すべき点は枚挙に暇がない。
挙句の果てに、自ら遠ざけた月島に頼るとは我ながら最悪だ。
けれども、今は早く来て欲しくて仕方がなかった。
「ッ！」
突然、背後から強い光に照らされる。

肩越しに振り返れば、黒いワンボックスが迫ってきていた。運転席に座るアズマと目が合い、血の気が引いていく。

アズマの乗った車はあっという間に俺を追い越すと、道路を塞ぐように停車した。どうやらすんなりと逃がしてはくれないようだ。

距離を取って立ち止まると、中から数人の男たちが降りてきた。

「殴ってくれた礼はさせてもらうぞ」

その顔触れには、ホテルで殴り倒した男たちも混じっていた。まだあちこち痛むようで腕や足を庇っていたが、その目は好戦的に輝いている。

「……っ」

ホテルのような狭い場所ならまだしも、こう開けた場所では圧倒的に不利だ。どう立ち回ってもすぐに囲まれてしまうだろう。流石に、前後左右から殴りかかられては勝ち目がない。

（引き返すにもこの足では振り切れない。時間を稼ぐしかないか？　しかし……）

横目で腕時計を確認する。月島に連絡してから約七分といったところか。あと、三分。いつもは気にもかけない時間だが、今は長く感じられて仕方がなかった。

この人数差だ。人一人囲んで殴って車に連れ込むには充分である。

せめて少しでも時間を稼ごうと、アズマに向けて語りかけた。

「アズマさんよ、これは話が違うんじゃないか？　俺は輪姦される趣味なんてないぞ」

「こっちだって、ただの会社員って聞いていたのに、とんだ不良がやってきて驚いてるよ。こんなに苦労させられるとは思わなかった」
「お前に不良とは言われたくない」
「まあ、そのくらいの方が甚振り甲斐があるけどな」
アズマの言葉に呼応して、周囲の男たちが下卑た笑い声を上げる。
そして、一人の男がバットを担ぎ直したのを皮切りに、男たちが次々と歩み寄ってきた。
「……っ」
後ずさりしかけたその時、けたたましいブレーキ音がワンボックスの向こうから響いてきた。男たちも驚きの色を浮かべ、不審そうに背後を見やっている。
恐る恐る、一人の男がワンボックスの向こうを覗き込み、不意に地面へ倒れ伏した。
「何だ⁉」
「コイツの連れか！」
気絶しているのか、ピクリとも動かない仲間を見て男たちが騒めく。
やがて、男たちの視線を一身に受けながら、一人の人物がゆっくりと歩いてきた。
逆光と薬でぼやけた視界ではよく見えなかったが、悠然とした立ち居振る舞いだけで、月島と分かる。
「は……っ」
その姿を見て安堵を覚えてしまい、思わず自嘲の声が漏れた。

……随分、都合のいいことだ。あれほど嫌厭していた癖に。

俺の葛藤を余所に、月島は普段の姿から想像できないほどの荒々しさで、男たちに掴みかかっていた。月島が喧嘩するところなど初めて見たが、その恵まれた体躯から繰り出される蹴りは目を見張る威力だ。喧嘩慣れはしていない様子だが、単純に一発が重い。

まだ動揺している男を一撃で蹴り倒し、殴りかかってきたもう一人の腕を捉えて背負い投げの要領で地面へ叩きつけていく。男はひくりと痙攣して、動かなくなった。

「テメェよくも！」

無防備になった背にアズマが拳を振り上げているのを見て、慌てて駆け出す。すれ違いざまに顔面を殴りつけ、続けて鳩尾に膝を叩き込み、今度は確実に意識を刈り取った。これでしばらくは目を覚まさないだろう。あともう一息だ。

休む暇なく横合いから繰り出されたバットを左腕で受け流す。腕が痺れるような衝撃に襲われながらも、飛び込んできた男の胸倉を掴んで股間を蹴り上げれば、男は痛みで気絶した。

振り返って月島の様子を確認すれば、向こうもあらかた片付け終えたようだ。何人かの男が、呻き声を上げながら地面に転がっていた。

「……ッ」

ふっと緊張の糸が切れて崩れ落ちる。一度座り込んでしまえば、もう立ち上がれそうになかった。気が抜けただけではない。アズマに嗅がされたのは筋弛緩系の薬だったらしく、

身体に上手く力が入らなくなっていた。
本当に、今回は危なかった。月島が来てくれなかったら、どうなっていた事か。
「篠崎……」
「悪かった、こんなことに巻き込んで」
いつもより低い月島の声が耳朶を打つ。その顔は、恐ろしくて見れなかった。
月島は黙って俺を抱えると、自分の車の後部座席へと詰め込んだ。
「少し待っていたまえ」
そして、何故か男たちの方へと戻って行く。
何をしているかは分からなかったが、何事か話し込んだ後、見慣れない大きな鞄を下げて戻ってきた。
「月島……その……」
「後で聞く」
居心地の悪い車内で絞り出した言葉は、すぐに切って捨てられた。
やはり怒っているのだろうか。当然だろう。誘いを断った男にいきなり呼び出されて、妙な騒動にまで巻き込まれたのだから。
「……」
怒っている原因はきっと、それだけではない。
分かっていたが、気付いていないフリをした。

2

月島の運転で自宅に辿り着いた頃には、夜もすっかり遅くなっていた。
「着いたぞ」
「あ、ああ……」
声をかけられ、慌てて車から降りる。不用意に着いた右足が痛んで、小さく息を飲んだ。それに目ざとく気付いた月島が、止める暇もなくズボンの裾をめくりあげる。散々酷使した右足は、すっかり赤くなってしまっていた。
「怪我をしたのか」
「少し、捻っただけだ」
「まったく、君は世話が焼ける……」
返す言葉もなく黙り込んでいると、抱きかかえられ、寝室のベッドまで運び込まれた。
「見せてみろ」
勝手知ったる様子で月島が湿布を持ってくる。おずおずと右足を差し出せば、おぼつかない手付きで応急処置が施された。湿布の端がよれているのはご愛嬌である。
「しばらくは安静にしているんだな」
「……さんきゅ」

小声で礼を言うと、月島は片眉を上げて応えてから「さて」と本題を切り出した。
「今回の件について、とりあえず君の弁明を聞こうか」
静かに尋問が開始される。未だ低いままの声とは裏腹に、顔には微笑を浮かべているのが逆に恐ろしかった。慎重に言葉を探すが、今回ばかりは弁明の余地がない。俺にできるのは、素直に非を認めて謝罪することだけだった。
「……迷惑かけてすまなかった。今日のことは、全面的に俺が悪い」
「ほう。君もたまには素直になれるのだね」
「……」
「おや、本当に珍しい。少しは反省しているようだな」
嫌味に反応すらしない俺に月島が瞠目する。流石に、ここで何か言えるほど恩知らずにはなれない。じっと目を伏せていると、月島は満足そうに頷いた。
「それならいい。……もっとも、その程度で許す私でもないがね」
戦慄して顔を上げたのと、カシャンという金属音が聞こえたのは同時だった。慌てて手元に視線を落とせば、俺の右手には銀色に光る手錠が嵌められていた。
「え？」
混乱している間に押し倒され、もう片端をベッドの支柱に繋がれる。
一体どこから手錠など出てきたのか、どうして自分は拘束されているのか。月島の顔色を窺うが、感情の読めない薄ら笑いからは何も推し量れなかった。

状況を飲み込めない俺を無視して、月島は黙々と手を動かしていく。
助けてもらった手前乱暴な真似はできないが、腕に力を込めてささやかな抵抗を試みる。
しかし、それは射竦めるような視線で制され、大人しく身を任せることにした。
結局、左手の自由も同じように奪われてしまう。
「つ、月島？」
「ふむ、悪くない眺めだね」
俺をベッドに磔にして、月島は口元だけで笑う。……そして。
「君はね、一度痛い目を見た方がいい」
ふっと笑顔を消した瞳の冷たさに、俺は言葉を失った。
「……っ」
固唾を飲んで次の動きを待つ。月島は節くれだった指を俺の首に添え、胸から腹まで滑らせたが、それ以上は何もせずに手を離す。その一挙手一投足から目を離せずにいた俺を鼻で笑うと、何故か背を向けて立ち上がった。
「たっぷり、反省したまえ」
一人残された部屋に、扉の閉まる音がやけに大きく響く。本当に出て行ってしまった。
意識していた以上に緊張していたのか、押し寄せた疲労感に深い溜息を吐く。
「一体、何が目的なんだ？」
その答えは、数分もしない内に明らかになる。

「……？」

じわり、じわりと腹の底から熱が湧き出してくる。始めは気のせいとも思った疼きは、耐えきれない熱へと変わっていく。

「な、なんだ……これ……」

明らかに自然のものではなかった。おそらくアズマに何か盛られていたのだ。そして、月島はそれを知っていた。車に乗り込む前に男たちと話していたが、その時か。

だからこうして拘束されたのだと、今更ながらに納得がいった。

「……くっ」

がしゃりと、張り詰めた鎖が耳障りな金属音を立てる。両手が自由であったなら、今頃夢中で自分を慰めていたことだろう。しかし、それは叶わない。じりじりと両足を擦り合わせれば微かな快感が生まれたが、それは自分を追い詰めるだけにしかならなかった。

生殺し、である。

「ふ……っ、はぁ……」

もどかしさに理性が蝕まれていく。無意識に腰が揺れ、ついに耐えきれなくなり、俺は何とか腹ばいになって、ベッドに股間を擦りつけた。

「あっ、はあっ……」

先ほどよりも確かな刺激に、喉が上ずる。自分がはしたない格好をしているとは理解していたが、荒れ狂う熱に急かされるまま、恥を忘れて夢中で腰を振り続けた。

布の上からの刺激では物足りなかったが、それでも少しずつ上り詰めてくる。固く目を瞑って、ようやく訪れた絶頂の快感に身を任せたその瞬間。突如腰を掴まれた。
「――ッあ、あ、ひ⁉」
「反省しろと言ったのに、一人で随分と楽しんでいるじゃないか」
「ば、か、見るなよ……！」
身体を無理矢理ひっくり返され、絶頂の衝撃で震える様をまじまじと観察される。紺のスーツがまるで粗相をしたかのように色を濃くしていく様まで視姦され、あまりの羞恥に視界が滲んだ。……いつから見られていたのかは、考えたくもない。
「……ッ」
「お漏らしとはいけないな」
嘲笑を浮かべた月島が、濡れた布地をなぞって追い打ちをかけてくる。薬で敏感になっている上に達したばかりの身体には、指先だけでも過ぎた刺激となった。
「ああ……っ！」
「そう物欲しげな声を出すな。夜は長いのだからな」
月島は楽しげに囁くと、ベッドの下から何かを取り出して俺の前へと掲げた。
それは男たちから奪ってきた、あの見慣れない大きな鞄だった。探るような視線を向けると、月島は見せつけるようにゆっくりと鞄を開け、中身を全てぶちまけた。
「は……⁉」

中から出てきたのは、えげつない色をした奇妙な物体の数々だ。その正体を理解した時、俺は口元を引き攣らせた。いわゆる、大人の玩具と言うヤツである。
「君のお友達が持っていた。まったく、怪しげな動画でも撮るつもりだったのかね？」
「……」
絶句した。
月島の軽口を笑い飛ばせないほど男たちの用意は周到だった。俺の両腕を拘束しているこの手錠も、その一つなのだろう。本当に、助けが来なかったらどうなっていたのか。
ゾッとする想像の答え合わせが、始まろうとしていた。
「さあ、篠崎君。薬も回ってきた様子だし、私が来ていなかったらどんな目に遭わされていたのか、味わってもらうとしようか」
「……ま、待って」
「待たない。手始めに、君のだらしない下半身を調教するとしよう」
抵抗できない俺に、月島の魔手が伸びる。
抱き殺される——本気でそう思ったが、最早逃れる術はなかった。
調教とやらが始められてから、どのくらいの時間が経っただろうか。
「月島……ッ！　つきしまぁぁ……！」
「まったく、君は待てもできないのか？」

焦らされ続けて飽和した熱が、俺の理性を溶かしていた。
調教と称して自身を戒められてから、一度も絶頂を許されていない。それなのに、体内に入れられた玩具は絶え間なく振動し、容赦なく俺を嬲り続けている。
月島は男たちが用意した玩具を全て試す気なのか、片っ端から手に取っては、俺に新たな刺激をもたらしていた。
「これはお気に召さないようだから、次の物にしてあげようか。待て、だよ。篠崎君」
「いや、やあぁ……！」
待て、と。何度そう聞かされたことか。
もう充分待った。待ったというのに、まだ許してはもらえないのか。
体内で振動していたモノが無造作に引き抜かれ、より質量を増した何かが挿入される。かちりと無機質な音がすると同時に、先ほどよりも重い振動が身を襲った。
下肢から響く機械音に、鼻をすする音が混じり始める。
「ああ……！　ううぅ……っやぁぁぁ……！」
ぼろぼろと勝手に涙が零れてくる。
涙と鼻水と、大分前に飲み込むことを諦めた唾液で、俺の顔は酷い有様になっているだろう。だが、月島が気にする様子はない。
「ほら、こんな物まであるぞ？」
そう言って愉しげに俺の眼前へ何かを掲げている。月島の手の動きに合わせてしなやか

に揺れるそれは、マドラーのような細い金属の棒だった。
使ったことは無かったが、それが何かは知っていた。尿道バイブである。
思わず背筋に冷たいものが走った。
「い、嫌だ、嫌だぁ……！　それ、したこと無いからっ……」
「こちら側を犯すのは私が初めてか？　それはいい」
俺の言葉に、月島は何故か機嫌を良くして笑う。そして躊躇いもなく俺の先端にソレをあてがうと、つぷりと侵入を開始した。
未知の痛みに襲われ、みっともなく足が震える。
「つ、つき、しま、痛い……って！」
「ゆっくりしてやるから落ち着きたまえ。良い子だからじっとしているんだよ」
「ひ、ひいっ……！」
優しげな声色とは裏腹に、バイブは容赦なく埋められていく。出口を塞いだため、必要なくなった戒めも解かれ、更に奥を犯されていく。
見た目は細くても、体内に挿れられればその異物感は凄まじい。無理矢理押し広げられていく感触に身を固くしていると、月島が場違いに柔らかい手つきで俺の太ももを撫でた。
「ひっ、んん……っ！」
やがてバイブがその身のほとんどを収めたところで、痛み以外の刺激に襲われる。
「そろそろイイところへ届いたか？」

尿道から挿し込まれたバイブによって、後ろから押し上げられている前立腺を前からも抉られる。耐え難い快楽に腰が跳ね、思いがけず一層深くバイブを飲み込んでしまい、声にならない声を上げた。
「ひ――ッ！」
「ここが気持ちいいのか？」
「や、待って、待てっ、おかしくなるッ！」
俺の反応を見て、月島が抽挿の速度を上げていく。前立腺を挟み込まれ、前からも後ろからも嬲られて、逃げ場の無い快楽に身悶えた。
よがり狂っている俺に対して、月島は嘲りを含んだ視線を送っている。今では、それも興奮を助長させる材料にしかならない。
「怖がっていた割には、もう随分と気に入ったようだな？」
「ううう……っ」
「それは何よりだが、これで終わりではないのだよ」
「や、やめて……！」
月島の指がバイブのスイッチへとかかる。力無く制止したが、無慈悲にもスイッチは入れられた。
「あっ、あああッ！　ひっ、ひいいっ‼」
「おっと危ない」

目の前が真っ白に染まるほど強い快感に晒され、全身が跳ねる。制御不能に陥った脚が月島の頬を掠めたが、そんなことに頓着している余裕はなかった。
「うあああっ、止めて、も、やだあぁぁッ！」
「何がそんなに嫌なんだ？」
「抜いて、これ……！　い、イかせてくれぇ……！」
必死に懇願しても、月島はまるで聞く耳を持たない。それどころか、まだ物足りなさそうに散らばった玩具の物色を始めている。
程なくして月島は、ゴムで出来た筒状のモノを手に取ると、悪魔の笑みを浮かべた。
「あ、あっ」
あれは、オナホールだ。とてつもなく嫌な想像が脳裏を過ぎる。
「もう少し我慢ができたらイかせてあげよう」
「ゆ、許し……て」
逃げ腰になる俺を捕まえて、月島はおもむろにオナホールを掲げる。そして、バイブが突き刺さったままの俺のモノをその中へと捻じ込んだ。
先端が空いていないタイプのため、月島の手の動きに合わせてバイブが奥まで押し込まれる。気が狂いそうな快楽になすすべもなく、喉の奥から引き攣った嬌声が絞り出された。
「も、むりぃ……！　し、死んじゃ……ああッ‼」
滅茶苦茶な呼吸を繰り返している内に視界がぼやけてくる。

もう息を吸っているのかしゃくり上げているのか分からなかった。
「たす、助けてっ！　つきしまぁぁ！」
恐怖か快楽か分からないものに突き動かされて、自由にならない手でもがく。当然だがいくら引っ張っても手錠は外れず、俺の腕に赤い跡を残すばかりだった。
「あんまり暴れるから、手首が真っ赤になってしまっているぞ」
力任せに暴れたせいで血が滲んだ手首を抑え込まれる。傷に這わされた舌の柔らかさとは裏腹に、もう片方の手は俺を責め苛み続けていた。
「つきしま、お願っ……も、許してくれ……ッ！」
「少しは反省したかね」
「した、反省したから……ッ！　ひっ、あ、許し……！」
月島は徐々に身体を下げながら、俺の首や胸に赤い跡を幾つも残していく。時折、歯を立てていくので、俺の身体は噛み跡と赤い華で酷い有様になってしまった。
身体中に所有の証を刻んだ月島は、満足げに目を細めてようやく手を止めた。
「これで少しは君も大人しくなるかな」
「ひっ……ぐぅ……」
「ほら、どうして欲しいのか聞いてあげよう」
月島が意地の悪い顔を寄せて、俺の耳元で囁く。
やっと、許してもらえる。それしか考えられず、ひくつく喉で懇願した。

「抜い、て……もう、イかせて、ください……ッ！」
「よく出来ました、と褒めてやるところかな？」
小馬鹿にするような声が響き、腹を立てるより先にバイブを一気に引き抜かれる。
内臓ごと引きずり出されそうな快感に襲われ、悲鳴のような声を上げて果てた。
「う、ああぁ――――ッ‼」
待ち望んだ解放に腰が浮き、がたがたと脚が震える。全身が言う事を聞かず、あちこちが好き勝手に跳ね動いていた。月島がゆるゆると手を動かすのに合わせて、次から次へと精液が吐き出されていく。
「あ、ぐぅ……あひ……っ」
長い絶頂に、見開いた目から涙が零れる。しばらく息を吸うこともままならなかった。ようやく全てを絞りつくされた頃には意識も遠くなっていたが、まだ気絶させてはもらえない。
「ひ、いいっ……！」
再び身を襲った暴力的な快感に意識を引き戻され、慌てて下肢に目を向ける。すると、白濁に塗れた俺自身を嬲り続ける月島と目が合った。
「いま、イったばかりだから、は、なして……っ」
「君は欲求不満みたいだから、しっかり搾り取っておこうと思ってね」
「うあ、は、はなせっ！」

本当に抱き殺す気なのかと思ったが、抗議の言葉を紡ぐこともままならない。必死で逃れようと藻がいたが、元より体格差もある身だ。形勢も不利な上に拘束までされていれば、全力で暴れてもロクな抵抗にならない。

俺を容易く組み伏せた月島の口から、低い声が落ちてくる。

「溜まっているのだろう？　セフレとして、責任を持って処理しようではないか」

これは、どうやら本気で怒っているらしい。普段から酷い鬼畜ぶりが一層増している。刺すような月島の視線に、きちんと反省を示さなければ、死ぬまで搾り取られるという確信が湧いた。

「ご、め……なさい、ごめんなさいぃ……ッ！」

本気の怒りに晒され、意地も矜持もかなぐり捨てて必死で謝罪の言葉を繰り返す。しかし、月島は薄皮一枚下に怒りを湛えた表情で、何も言わずに俺を見下ろしていた。

「ゆる、して……っ許して、くださ……ぁ！」

「……」

「反省した、したから！　お願い……っ放してぇ！」

それでも、許しを請い続けることしかできない。

半狂乱になって髪を振り乱し、もつれた舌でただただ謝罪を重ね続けた。

やがて、二度、三度と立て続けに絶頂へ追いやられ、呻き声しか上げられなくなった頃。

「――――ッ‼　……か、は……ッ！」

一際大きな波が訪れて、俺は瞬間的に意識を失った。

多分、その一瞬は死んでいたとすら思う。止まっていた息と共に現実に戻った俺の前には、驚いた月島の顔とびしょ濡れになったシーツがあった。

何が起こったか分からない。こんな感覚は初めてだ。

呆然と目をやれば、月島は目を丸くして、汗と体液に塗れた俺の身体を眺めていた。

「……驚いた。まさか、今のは潮か？」

「……あ……？」

「君は、今まで幾人の男にその身を開発されてきたのだろうな……！」

「う、あ……」

絶頂の衝撃で現実感がなく、月島の言葉が理解できない。それでも、月島が苛立っていることだけは何となく感じられた。いや、苛立ちと表現するのは正しくないかもしれない。

これは、嫉妬だ。今まで俺を抱いてきた名も知らぬ男たちに向けて、月島は煮えたぎる嫉妬心を向けていた。

「頼むから、もう誰にも、こんな姿を見せないでくれ……ッ！」

珍しく感情を露わにして月島が呻く。完璧人間に相応しくないその歪んだ表情は、何故だか俺の心をひどく掻き乱した。

何か、言わなくては。コイツにこんな顔をさせているのは俺なのだから。

「……っ、ぁ……」
沸き上がる後悔に突き動かされて口を開いたが、乾ききった喉から零れたのは掠れた吐息だけだった。一度唇を閉ざし、僅かな唾を飲み込んで何とか喉を湿らせる。
胸を突き刺すようなこの痛みを、早く言葉にして吐き出してしまいたくて仕方なかった。
「ごめ、なさい……っも、しないから……」
「……ああ」
もう何度目になるか分からない謝罪の言葉を必死で口にしたところ、ようやく月島はそれを受け入れた。口先だけの台詞ではないことが伝わったのかもしれない。
二度と今日のような真似はしないと、心の底から思っていた。手酷く抱かれたからではない。月島が晒した感情にあてられてしまっていた。
二度とそんな顔をさせたくないと思うほどには。
「……んッ」
ずるりと後穴からバイブを引き抜かれ、しばらくぶりに快楽から解放される。未だ小さく痙攣を続けながら呼吸を整えていると、ぽつりと月島が呟いた。
「――君から電話をもらったとき、心底、肝を冷やしたんだ」
先刻までの様子が嘘のように、弱々しい声だった。
見れば、糸が切れてしまったかのように力なく座り込んでいる。いつもは真っ直ぐ伸ばしている背中を丸めて、肩を落としているせいか、月島の姿が妙に小さく見えた。

「君を満足させるためなら何でもする。だから、頼む。もう危ない真似はしないでくれ」
「つ、き……しま……」
力無く項垂れた頭にそろそろと手を伸ばす。しかし、かしゃんと鳴った鎖に阻まれた。その音に気付いた月島が、鍵を取り出して手錠を外す。
「なに……？」
解放された手でぐしゃりと月島の髪を掻き交ぜると、不思議そうな声が上がった。
自分でも説明が付かない行動について聞かれても困る。ただ、無性にそうしてやりたかっただけなのだから。
乱れた髪の向こうで、月島の瞳が揺れている。それを見ていられなくて、俺は月島を強引に抱き寄せた。
「篠、崎……？」
腕の中に抱えた身体は固く強張っていたが、やがてゆっくりと力が抜けていく。スーツ越しにも、月島の体温と鼓動が高まっていくのが分かった。
「篠崎君……！」
震えてくぐもった声で名を呼ばれる。堰を切ったように、何度も、何度も。
更には、胸元が熱い雫で濡れていくのを感じて、俺は堪らず腕の力を強めた。
「本当に、悪かった」
「もう、今日の事は」

「違う。……お前を傷付けて、悪かった」
月島が息を飲んで身を起こす。俺に負けず劣らず酷い顔をした男に手を伸ばし、先ほど乱した髪を、今度は綺麗に撫で付けてやる。額にかかった髪も丁寧に払い除け、ようやく元の男前が戻ってきたところで、俺はわざとらしい声を作って言った。
「俺を満足させるためなら、何でもしてくれるって言ったよな」
「……ああ」
「それならさ……散々、裸で放っておかれて寒いんだよ。温めてくれ」
ぽかんと、月島が呆気にとられた表情を浮かべる。
そして、聞き間違いかと思うような微かな笑い声と共に腰を抱かれた。
「まったく、君ってヤツはどこまでも……！」
「く、あ……っ！」
性急に、熱い高ぶりが押し当てられる。充分に慣らされたそこは、何の抵抗も無く月島を最奥まで受け入れた。
「あ、つい……」
無機物とは異なる熱量で満たされ、うわ言のように呟く。月島は震える俺の身体を強く掻き抱き、ゆっくりと動き始めた。
「は……中までうねっているな」
端正な顔を歪ませて、月島が荒い息を吐く。

口元に流れ落ちた汗を赤い舌がぺろりと舐め取る様を見て、胸が焼けるような心地がした。誘われるままその顔を手繰り寄せ、深く口づける。

「つ、きしまぁ……！」

邪魔なスーツをたくし上げ、広い背中に縋り付く。激しい動きに振り落とされそうになる度に爪痕を増やしながら、必死でしがみついた。

「篠崎……ッ」

切羽詰まった声が耳朶を打つ。固く閉じていた目を開けば、欲望に満ちた瞳が俺を映していた。まばたきすら惜しむほど強く求められ、心の奥底まで貫かれる。

だめだ、いけないと思っていても、優越感とは違う感情が胸を満たしていく。

そんな自分を認めることは、どうしてもできなかった。

怖かった。

この感情を受け入れてしまえば、何もかもが変わってしまいそうで恐ろしかった。

「……ッ」

「なあ、私では、駄目か……？」

浮かびかけた想いを打ち消そうと首を振る俺の頬に、月島の手が添えられる。互いの体温が混ざり合っていく感覚に、温かな涙が零れ落ちた。俺の目を覗き込んだ月島の瞳の奥に、劣情とは異なる熱を見てしまい、喉がつかえる。

どうしようもなく胸が苦しかった。

「俺は……っ！」
口にしようとした否定の言葉と共に、月島が俺の唇を喰らう。
臆病さの滲む、貪るような口付けに、何も言えなくなってしまい……後はもう、どちらも言葉を発しないまま。
やがて空が白んで来るまで、ただひたすらにお互いの熱を求め続けた。

3

夢を、見ていた。
母親に頭を撫でられている夢だ。ぼんやりと焦点が合わない視界には、今よりずっと小さな自分の手と、それを握る父親の姿が映っている。両親は、俺に向かって何か話しかけていたが、その声は分からなかった。夢の中でさえ、思い出せないのだ。
無理もない。二人が亡くなってから、もう十年以上経つのだから。
「……！」
両親の死を認識した瞬間、二人の姿が掻き消える。そして暗闇にひとり残され、冷たい孤独に息が詰まる。それが、いつも見ている夢の続きだった。
しかし、今日は違った。
一人きりになった後も不思議と温かく、優しい風が髪を撫ぜて孤独を散らしていく。

何故だろう。首を傾げていると、闇の向こうから聞き慣れた低い声が響いてきた。
篠崎君、と。
「……ぁ」
優しく髪を梳かれる感触で目を覚ます。瞼を開ければ、月島が筋張った手でゆっくりと俺の頭を撫でていた。
「おはよう、篠崎君」
「……はよ」
眠っている間に滲んでいた涙を、気取られないようにそっと拭う。伏し目がちに様子を窺えば、月島は俺を抱え込みながら微笑んでいた。
嬉しそうに蕩けたその表情に、こんな顔をするのかと気恥ずかしくなる。たった数ヶ月の間に、俺は月島の様々な表情を見てきた。
月島は、意外と感情豊かな男だ。
会社では無表情か薄ら笑いしか浮かべないその顔は、プライベートでは存外よく動く。笑うし、へこむし、嫉妬もすれば怒りもする。そして何よりも、愛情深い。表情だけではなく、俺に触れる指使いや、視線の奥からも、その想いはひしひしと伝わっていた。
だから、きっと。いつかこんな日が来てしまうと恐れていた。
「篠崎君」
静かな声が静寂を打ち破る。

「初めはセフレでもいいと思っていたんだ。君に触れられるなら何でも良かった。でも、嫌になってしまった。君に危ない真似をして欲しくない、もっと自分を大事にして欲しい、他の男と寝ないで欲しい。そう思うのに、今の私には何も言う権利がないのだから」

苦しげに言葉を紡ぐ月島から顔を逸らし、何も言えずに目を伏せる。

「もう、耐えられない。私は、意外と欲張りだったみたいでね。君の側に居ることを許されても、共に寝ることを認められても、次から次へと欲しくなる。君の全てを、誰にも分け与えたくない。自分の感情がこれほど制御できなくなるとは、思ってもみなかったよ」

理性的な人間だと自負していたのにね、と月島は小さく笑う。

そのあまりにも無防備な、『完璧人間』とはかけ離れた笑みを見て、直感的にこれ以上聞いては駄目だと感じた。

この先を聞いてしまったら、今のままではいられなくなる。

しかし、制止する声は喉の奥につかえて出てこない。

「……っ」

気付けば、俺の唇も小さく震えていた。

「篠崎君。私は、君が好きだ」

そう述べた月島は、初めて見る弱気な笑顔を浮かべていた。

その顔に、声に、温もりに、溶かされる心地がして恐ろしくなる。いつの間にか、こんなにも月島の言葉に揺さぶられるようになってしまった自分がいた。

もう、変わってしまったのだ。

変化を自覚した瞬間、胸の内を不安が満たす。両親に先立たれ、独りぼっちになったあの日から、俺は一人で生きていく覚悟を決めていたというのに。この先どうやって過ごせばいけばいいのか、一瞬で分からなくなってしまった。

「初めて会った時には、馬が合わない男だと思っていたが、気が付けば目で追っていた。対等に張り合ってくる君が眩しくて仕方なかった。征服欲や支配欲だと思っていた感情が、いつしか独占欲に変わっていたんだ」

月島の声は、徐々に熱を帯びていく。

「自分の感情に気が付いた時には、一生伝えまいと思っていた。間違った感情を抱いてしまって君に申し訳がなかった。だからホテルで会った時には驚いたよ。君が同性愛者だと知って、今度は逆に、絶対諦めないと決めたのだ。……君にとっては迷惑な話だったかもしれないが」

少し言葉が途切れて、うるさいほどの心臓の音が聞こえてくる。密着し過ぎて、どちらのものか分からない。

「これほど、人に心揺さぶられるのは初めてだったのだ。君が笑う度に胸が苦しくなる。怒った姿でさえ愛おしい。意地っ張りなところも、隙あらば噛み付いてくるところも全部

好きだ。たまに憎らしく思う時もあるけれど、それも愛嬌だと思っている」
「や、めろよ……」
月島の真摯な瞳を見ていられなくて目を逸らす。真っ直ぐに向けられる好意が、怖くて怖くて仕方がない。月島の言葉を聞く度に、自分が弱くなってしまう気がした。
「なあ。私では、駄目か？　私は、君でなければ駄目なんだ」
「俺は……」
頭の中がぐちゃぐちゃで、すぐには答えが出てこない。人肌の温もりに惹かれる心と、いつか訪れるかもしれない別れの冷たさに恐怖する心がせめぎ合っていた。
寂しい、欲しい、でも怖い。矛盾する感情が渦巻く。いっそ、何もかも放り出して逃げ出してしまいたかったが、月島の誠意を蔑ろにもできない。
観念して、胸の内に秘めていた感情を少しずつ吐き出していく。
「……情けない、話だけど。俺、恋人とか、持つのが怖いんだ」
零れ落ちた言葉は自分でも驚くほど弱々しく、小さな声だった。
「満たされるほど、失った時の辛さを考えてしまうんだよ。いつか置いていかれることに怯えるくらいなら、最初から居ない方がずっと、マシなんだ。手にしなければ、失うこともないだろ？」
途切れ途切れで聞き取り辛い言葉に、月島は静かに耳を傾けている。一体どんな顔で話を聞いているのか、とても直視できないまま、俺は一方的にまくし立てた。

「俺はずっと一人で生きてきた。これからも、そうするつもりだったんだ。ここでお前の手を取ったら、そんな覚悟、もうできなくなってしまう。弱い自分に逆戻りするのだけは嫌なんだ」

自分の思いを口にすればするほど、その自己中心っぷりに嫌気が差す。己のことだけで手一杯で、月島の気持ちをこれっぽっちも酌んでやれない。

それでも月島は、俺を見放さなかった。

「私は、絶対に君を手放したりしない。……信じてくれないか？」

呆れずに、根気強く手を差し伸べてくれる。

それでも、その手を取れるだけの勇気は、まだ、無かった。

「俺は、お前の気持ちには応えられないよ。月島……」

心に付いた傷から目を逸らし、向き合わずに逃げ続けてここまで来てしまった。

痛みを忘れたフリをして、強くなったと勘違いしながら生きてきた自分が、今更その恐怖と真正面から向き合うなんて――ましてや克服するなんて、できるとは思えなかった。

いつまでも、俺の臆病に月島を付き合わせる訳にはいかない。

……これで、本当に終わりにしよう。

そう決意して、後ろ髪を引かれる思いで月島の腕を解く。

目を伏せたまま胸を押し退ければ、開いた隙間に流れ込んだ冷たい空気に身が震えた。

「……ッ」

小さく息を詰める音が聞こえて胸が痛む。俺に、そんな資格は無いというのに。唇を噛んで月島から手を離したが、その手は縋るようにして絡め取られた。
「頼む、逃げないでくれ」
俺が離れた分だけ月島が身を寄せ、二人の隙間を埋める。一際強く抱き寄せられ、冷えた身体に熱が戻った。
こんな時でも、コイツは俺の決意を邪魔するというのか。八つ当たりに過ぎない怒りと、胸を締め付けられるような苦しさで目頭が熱くなる。いつもそうだ。この男は、俺の思い通りにはなってくれない。
「今はまだ難しいと言うのなら、君が信じてくれるまで側に居る。応えてくれなくても構わないから、どうか待たせて欲しい」
「でも……」
「頼むから、終わらせようとしないでくれ。ようやく想いを伝えられたのに……！」
「……っ」
「お願いだよ、篠崎君……お願いだ……っ」
月島の懇願に胸が痛む。どうしてコイツは、俺なんか好きになってしまったのだろう。もっと他に、幸せになれる選択肢が沢山あっただろうに、どうして。
「……分かった」
そう口にした瞬間、深い罪悪感に身を切られる心地がした。

結局、月島を拒み切れなかった。全身を包む温もりに安堵すると同時に、自らの酷さに自嘲が漏れる。受け入れられない癖に、きちんと振ってやることもできないとは。中途半端な酷い男である。

きっともう手遅れなのだ。月島は、とっくに俺の心に居場所を作ってしまっている。

それでも。まだ、認めるまでには時間が必要だった。

いつか、月島の気持ちを受け入れられる日が来るのか。

それは分からないけれども、今はただ目を瞑って、月島の体温に身を任せた。